東北大学付属図書館　漱石文庫

夏目漱石について

（神奈川近代文学館提供）

夏目漱石について

夏目漱石（本名、夏目金之助）は、慶応 3 年（1867 ）、江戸牛込馬場下横町（現在、新宿区喜久井町）に生まれた。幼くして養子に出された。

東京帝国大学卒業後、松山中学校、熊本第五高等学校などで英語を教える。

明治 33 年（1900）から明治 35 年（1902）まで、英国へ留学する。

帰国後、東京帝国大学などで教鞭を取るが、明治 38 年（1905）、「ホトトギス」に『吾輩は猫である』を連載、明治 40 年（1907）には教職を辞し朝日新聞社に入社する。

以後、朝日新聞に『虞美人草』、『三四郎』、『それから』、『門』、『彼岸過迄』、『行人』、『こゝろ』、『道草』、『明暗』などを連載する。

大正 5 年（1916）12 月 9 日、胃潰瘍のため死去。

夏目漱石年譜

年	漱石の生涯と作品	文学・思想・社会
幼少時代		
慶応 3(1867)	誕生　里子へ出される	
明治 1(1868)	塩原家の養子となる	王政復古の大号令
明治 2(1869)		版籍奉還
明治 3(1870)	天然痘にかかる	
明治 4(1871)		廃藩置県
明治 5(1872)		福沢諭吉『学問のすゝめ』
明治 6(1873)		地租改正
明治 7(1874)	第八番公立小学校戸田学校下等小学校第八級に入学	
明治 8(1875)	養父母離婚　夏目家に引き取られる	
明治 10(1877)	中根キヨ誕生	西南戦争
明治 12(1879)	東京府第一中学校正則科第七級乙科に入学する	イプセン『人形の家』 ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』
明治 14(1880)	1 月　母・ちゑ死去 4 月　漢学塾二松学舎第三級第一課に入学する	
明治 16(1883)	大学予備門受験準備のため　成立学舎に入る	モーパッサン『女の一生』

明治 17(1884)	東京大学予備門（明治 19 年に第一高等中学校と改称）予科に入学する	
明治 18(1885)		坪内逍遥『当世書生気質』 内閣制度確立
明治 19(1886)	7 月　第一高等中学校予科第二級から一級への進学試験を受けられず留年する	スティーヴンソン『ジキル博士とハイド氏』
学生時代		
明治 20(1887)	3 月　長兄・大助死去 6 月　次兄・直則死去	二葉亭四迷『浮雲』
明治 21(1888)	1 月　夏目家に復籍する 9 月　第一高等中学校本科第一部（文科）に進学する	
明治 22(1889)	1 月頃　正岡子規と次第に親しむ 2 月　英語会で The Death of My Brother を発表 5 月　正岡子規『七艸集』に「漱石」と署名 9 月　『木屑録』脱稿	ベルクソン『時間と自由意思』 大日本帝国憲法発布
明治 23(1890)	9 月　帝国大学文科大学英文学科入学する	森鴎外『舞姫』 第一回衆議院選挙 教育勅語
明治 24(1891)	7 月　嫂・登世死去 12 月　ディクソン教授の依頼により『方丈記』を英訳する	ワイルド『ドリアングレイの肖像』 大津事件
明治 25(1892)	4 月　北海道に移籍する 5 月　東京専門学校（現　早稲田大学）の講師となる	正岡子規『獺祭書屋俳話』

明治 26(1893)	7 月　帝国大学大学院に入る 10 月　高等師範学校英語嘱託となる	北村透谷『内部生命論』
明治 27(1894)	8 月　松島に赴き　瑞厳寺に詣でる 12 月　鎌倉・円覚寺の釈宗演を知る	樋口一葉『大つごもり』 ズーダーマン『過去』(The Undying Past) アナトール・フランス『白い百合』 日清戦争
松山・熊本時代		
明治 28(1895)	4 月　愛媛県尋常中学校嘱託教員に任命される。生徒には　真鍋嘉一郎　松根豊次郎（東洋城）ら 6 月　転居し「愚陀仏庵」と名付ける 8 月－10 月　正岡子規が同宿しほぼ毎晩運座をおこなう 12 月　中根鏡と見合いをし婚約が成立する	樋口一葉『たけくらべ』 下関条約 三国干渉
明治 29(1896)	4 月　熊本県第五高等学校に赴任する　『フランスの革命』　『ハムレット』　『オセロ』を講義する 6 月　鏡との結婚式を挙げる	
明治 30(1897)	6 月　父・直克死去	尾崎紅葉『金色夜叉』 島崎藤村『若菜集』
明治 31(1898)	7 月頃　鏡　自殺を図る	国木田独歩『武蔵野』 徳富蘆花『不如帰』
明治 32(1899)	5 月　長女・筆子誕生	土井晩翠『天地有情』
英国留学時代		
明治 33(1900)	5 月　文部省から英国留学を命じられる	泉鏡花『高野聖』

	9 月　横浜港出港 10 月　ロンドン着　クレイグ教授の個人授業を受ける	
明治 34(1901)	1 月　次女・恒子誕生 5 月　池田菊苗との親交 8 月　土井晩翠をヴィクトリア駅まで迎える	与謝野晶子『みだれ髪』
明治 35(1902)	9 月　子規死去 10 月　スコットランド旅行 12 月　帰国の途に着く	ゴーリキ『どん底』 日英同盟
小説執筆時代Ⅰ		
明治 36(1903)	1 月　帰国 4 月　第一高等学校講師　東京帝国大学英文科講師 10 月　三女・英子誕生	藤村操自殺
明治 37(1904)	4 月　明治大学講師 12 月　「吾輩は猫である」を「山会」で朗読	チェーホフ『桜の園』 日露戦争
明治 38(1905)	1 月　「吾輩は猫である」(『ホトトギス』) 1 月　「倫敦塔」(『帝国文学』) 1 月　「カーライル博物館」(『学燈』) 6 月　「琴のそら音」(『七人』) 12 月　四女・愛子誕生	日露講和会議
明治 39(1906)	4 月　「坊っちやん」(『ホトトギス』) 9 月　「草枕」(『新小説』) 10 月　「二百十日」 10 月 11 日　第 1 回「木曜会」	伊藤左千夫『野菊の墓』
小説執筆時代Ⅱ		
明治 40(1907)	1 月　「野分」(『ホトトギス』)	田山花袋『蒲団』

	3 月末～4 月初　京都　大阪に旅行 5 月　『文学論』（大倉書店） 5 月　入社の辞（『東京朝日新聞』） 6 月　長男・純一誕生 6 月～10 月　「虞美人草」 6 月　西園寺公望からの文士招聘会を断る 9 月　牛込区早稲田南町 7 番地へ転居	
明治 41(1908)	1 月～4 月　「坑夫」 6 月　「文鳥」 7 月～8 月　「夢十夜」 9 月～12 月　「三四郎」 「吾輩は猫である」のモデルの猫死亡 12 月　次男・伸六誕生	
明治 42(1909)	1 月～3 月　「永日小品」 6 月～10 月　「それから」 9 月～10 月　中村是公と満州、朝鮮旅行 10 月～12 月　「満韓ところどころ」 11 月　朝日文芸欄創設	ジェイムズ『多元的宇宙』 森田草平『煤煙』 伊藤博文射殺
明治 43(1910)	3 月～6 月　「門」 6 月　胃潰瘍のため長与胃腸病院に入院 8 月　伊豆修善寺温泉に転地療養　大量の吐血のため危篤状態に陥る 10 月～翌 2 月　「思ひ出す事など」	長塚節『土』 森鴎外『青年』 「白樺」創刊 大逆事件 日韓併合
明治 44(1911)	2 月　文学博士号を辞退 7 月　「ケーベル先生」 11 月　ひな子急死	武者小路実篤『お目出たき人』 森鴎外『雁』
明治 45 大正元(1912)	1 月～4 月　「彼岸過迄」 12 月～翌 11 月「行人」	明治天皇崩御 乃木大将殉死
大正 2(1913)	2 月　『社会と自分』	中勘助『銀の匙』 志賀直哉『范の犯罪』

大正 3(1914)	3 月　「私の個人主義」(『輔人会雑誌』) 4 月～8 月　「こゝろ」	第一次世界大戦
大正 4(1915)	1 月～2 月　「硝子戸の中」 3 月　京都旅行 6 月～9 月　「道草」 12 月　芥川龍之介　久米正雄らが木曜会に参加	芥川龍之介『羅生門』
大正 5(1916)	5 月～12 月　「明暗」 12 月 9 日　死去	芥川龍之介『鼻』

幼少時代

夏目漱石（本名、夏目金之助）は、慶応 3 年（1867）1 月 5 日（陰暦）、父・夏目小兵衛直克と母・夏目ちゑ（千枝）の 5 男 3 女の末子として、江戸牛込馬場下横町（現在、新宿区喜久井町 1 番地）に生まれた。

「金之助」と名付けられたのは、漱石の誕生日が「庚申の日に当り、庚申の日に生れた子供は大泥棒になる、然しそれをよける為には名前に「金」の字をつけるといいという迷信があった」（小宮豊隆『夏目漱石』）ためだった。

漱石は生後間もなく里子へ出された。漱石は当時のことについて次のように回想している。

私は両親の晩年になつて出来た所謂末ツ子である。私を生んだ時、母はこんな年歯をして懐妊するのは面目ないと云つたとかいふ話が、今でも折々は繰り返されてゐる。 単に其為ばかりでもあるまいが、私の両親は私が生れ落ちると間もなく、私を里に遣つてしまつた。其里といふのは、無論私の記憶に残つてゐる筈がないけれども、成人の後聞いて見ると、何でも古道具の売買を渡世にしてゐた貧しい夫婦ものであつたらしい。
（「硝子戸の中」）

漱石は里からいったんは生家に引き取られたが、すぐに四谷大宗寺門前名主塩原昌之助・やす夫妻の養子となった。

私は何時頃其里から取り戻されたか知らない。然しぢき又ある家へ養子に遣られた。それは慥私の四つの歳であつたやうに思ふ。私は物心のつく八九歳迄其所で成長したが、やが

て養家に妙なごた／＼が起つたため、再び実家へ戻る様な仕儀となつた。
（「硝子戸の中」）

自伝的な要素の強い『道草』には、漱石自身をモデルとしていると考えられる主人公・健三と、養父母をモデルとしていると思われる島田夫妻との関係について、次のような場面が描かれている。

彼等が長火鉢の前で差向ひに坐り合ふ夜寒の宵などには、健三によく斯んな質問を掛けた。
「御前の御父ツさんは誰だい」
　健三は島田の方を向いて彼を指した。
「ぢや御前の御母さんは」
　健三はまた御常の顔を見て彼女を指さした。
　是で自分達の要求を一応満足させると、今度は同じやうな事を外の形で訊いた。
「ぢや御前の本当の御父さんと御母さんは」
　健三は厭々ながら同じ答へを繰り返すより外に仕方がなかつた。
（中略）
　或時はこんな光景が殆ど毎日のやうに三人の間に起つた。或時は単に是丈の問答では済まなかつた。ことに御常は執濃かつた。
「御前は何処で生れたの」
（『道草』）

明治 8 年（1875）、養父母の離縁が成立し、漱石は塩原家に在籍したまま夏目家に戻った。しかし漱石が正式に夏目家に復籍するのは、明治 21 年（1888）になってからのことだった。

漱石は、文学への志望は、15、6 歳から始まったと記している。

私も十五六歳の頃は、漢書や小説などを読んで文学といふものを面白く感じ、自分もやつて見ようといふ気がしたので、それを亡くなつた兄に話して見ると、兄は文学は職業にやならない、アツコンプリツシメントに過ぎないものだと云つて寧ろ私を叱つた。然しよく考へて見るに、自分は何か趣味を持つた職業に従事して見たい。それと同時にその仕事が何か世間に必要なものでなければならぬ。
（「談話（時機が来てゐたんだ）」）

学生時代

漱石と正岡子規の出会いと交流

明治 17 年（1884）9 月、漱石は東京大学予備門予科（明治 19 年 4 月、第一高等中学校に改称）に入学した。同級には、正岡常則（子規）、南方熊楠、山田武太郎（美妙）、芳賀矢一ら、後に俳人や学者、作家として活躍することになる人物らがいた。

文学的な影響を及ぼしあった漱石と子規だが、当初、二人は親しく交わることはなかったようだ。

正岡子規（本名常規、幼名処之助、のちに升と改名）は、慶応 3 年（1867）9 月 17 日（陰暦）、伊予国温泉郡藤原新町（現在、松山市花園町）に生まれた。父は松山藩士の常尚、母は松山藩の儒学者であった大原観山の長女・八重。しかし父は若くして死去したため、子規と妹の律は、母と大原家の庇護のもとに成長することになる。特に祖父・観山は、幼い子規に漢文・漢詩の素読を教えるなど大変に可愛がり、子規は、「後来学者となりて翁の右に出でんと思へり」（『筆まかせ』）と語るほど、観山に憧憬の念を抱いていたという。母・八重は幼少の子規について、次のように回想している。

「小さい時分にはよつぽどへぼで／＼弱味噌でございました。（中略）組の者などにいぢめられても逃げて戻りますので、妹の方があなた石を投げたりして兄の敵打をするやうで、それはヘボでございます」（「母堂の談話」）

子規自身も、「僕は子供の時から弱味噌の泣味噌と呼ばれて小学校に往てもたびたび泣かされて居た」（『墨汁一滴』）と述べている。

子規は、小学生の頃から創作活動に熱中し、雑誌を作っては仲間たちに回覧していたという。また中学生になってからは、政治にも強い関心を抱き、盛んに政談演説を行った。

子規は、明治 15 年頃から東京で学ぶことを希望するようになり、明治 16 年（1883）6 月、念願が叶って上京する。

子規はのちに「余は生れてよりうれしきことにあひ思はずにこ／＼とゑみて平気でゐられざりしこと三度あり第一は在京の叔父のもとより余に東京に来れといふ手紙来たりし時」（『筆まかせ』）と記している。

子規は、明治 18 年（1885）、入学初年度の学年末試験で不合格となり、落第している。

「数学の時間には英語より外の語は使われぬという規制」があり、「数学と英語と二つの敵を一時に引き受けたからたまらない」、「余が落第したのは幾何学に落第したといふよりは寧ろ英語に落第したといふ方が適当であらう」（『墨汁一滴』）。

一方の漱石も、「惰けて居るのは甚だ好きで少しも勉強なんかしなかつた」、「唯遊んで居るのを豪いことの如く思つて怠けて居た」（「落第」）ところ、明治 19 年（1886）、腹膜炎のため進級試験を受けられず成績も悪かったため落第してしまう。漱石はこの落第について後年つぎのように述べている。

人間と云ふものは考え直すと妙なもので、真面目になつて勉強すれば、今迄少しも分からなかつたものも瞭然と分る様になる。（中略）恁んな風に落第を機としていろんな改革をして勉強したのであるが、僕の一身にとつて此落第は非常に薬になつた様に思はれる。（「落第」）

学生時代の漱石（左、右は米山）　　明治 21 年（1888）9 月、漱石と子規は第一高等中学校本科第一部（文科）に入学した。専攻を決めるさい漱石ははじめ建築科を希望し、将来は「ピラミツドでも建てる様な心算で居」たが、同級生の米山保三郎に、「それよりも文学をやれ、文学ならば勉強次第で幾百年幾千年の後に伝へる可き大作も出来るぢやないか」と勧められたため、「決心を為直して、僕は文学をやることに定めたのであるが、国文や漢文なら別に研究する必要もない様な気がしたから、其処で英文学を専攻することにした。」（「落第」）と述べている。

漱石に文学を勧めた米山は、漱石によれば、「それこそ真性変物で常に宇宙がどうの、人生がどうのと大きなことばかり言つて居る」（談話「時機が来てゐたんだ」）人物であり、子規とも交遊を持った。帝国大学哲学科の子規が国文科に転科したのは、米山の才能に驚

嘆し、哲学では米山に適わないと考えたことが理由の一つであるとも言われている。

漱石と子規が親しく交流するようになるのは明治 22 年（1889）1 月頃からであった。二人は、共通の趣味である寄席の話題などを通じて親交を深めて行く。子規は、明治 22 年の『筆まかせ』の中で、漱石を「談心の友」、「畏友」と呼んでいる。

後年、漱石は子規について次のように回想している。

非常に好き嫌いのあつた人で、滅多に人と交際などはしなかつた。僕だけどういふものか交際した。（中略）彼と僕と交際し始めたも一つの原因は二人で寄席の話をした時先生も大に寄席通を以つて任じて居る。ところが僕も寄席の事を知つてゐたので話すに足るとでも思つたのであらう。其から大に近よつてきた。　（中略）

何でも大将にならなけりや承知しない男であつた。二人で道を歩いてゐてもきつと自分の思ふ通りに僕をひつぱり廻したものだ。尤も僕がぐうたらであつてこちらへ行かうと彼がいふと其通りにして居つた為であらう。

（「正岡子規」）

子規といふ男は何でも自分が先生のやうな積りで居る男であつた。俳句を見せると直ぐにそれを直したり圏点をつけたりする。それはいゝにしたところで僕が漢詩を作つて見せたところが、直ぐに又筆をとつてそれを直したり、圏点をつけたりして返した。それで今度は英文を綴つて見せたところが、奴さんこれだけは仕方ないものだから Very good と書いて返した。

（高浜虚子『漱石氏と私』）

一方子規は、次のように述べている。

余は交際を好む者なり　又交際を嫌ふ者也　何故に好むや　良友を得て心事を談じ艱難相助けんと欲すれば也　何故に嫌ふや　悪友を退け光陰を浪費せず誘導をのがれんと欲すればなり　余ハ偏屈なり　頑固なり、すきな人ハ無暗にすきにて嫌ひな人ハ無暗にきらひなり

（『筆まかせ』明治 22 年）

漱石最もまじめの性質にて学校にありて生徒を率いるにも厳格を主として不規律に流るるを許さず。紫影の文章俳句常に滑稽趣味を離れず。此人亦甚だまじめの方にて、大口あけて笑うことすら余り見うけたる事無し。

（『墨汁一滴』）

また漱石門下の寺田寅彦は、漱石と子規について次のように回想している。

熊本の近況から漱石師のうわさになつて昔話も出た。師は学生の頃は至つて寡言な温順な人で学校なども至つて欠席が少なかつたが子規は俳句分類にとりかゝつてから欠席ばかりして居たさうだ。師と子規と親密になつたのは知り合つてから四年もたつて後であつたが懇意になると随分子供らしく議論なんかして時々喧嘩などもする。
（「子規庵を訪う記」）

高等学校を出て大学へはひる時に、先生の紹介を貰つて上根岸鶯横町に病床の正岡子規子を訪ねた。その時、子規は、夏目先生の就職其他に就いて色々骨を折つて運動をしたといふやうな話をして聞かせた。実際子規と先生とは互に畏敬し合つた最も親しい交友であつたと思はれる。併し、先生に聞くと、時には「一体正岡といふ男はなんでも自分の方がえらいと思つて居る、生意気な奴だよ」などゝ云つて笑はれることもあつた。さう云ひながら、互に許し合ひなつかしがり合つて居る心持がよく分かるやうに思はれるのであつた。
（「夏目漱石先生の追憶」）

子規は、明治 22 年（1889）5 月初旬に喀血し、肺結核と診断された。この時、子規は、「卯の花をめがけてきたか時鳥」、「卯の花の散るまで鳴くか子規」など、時鳥（ほととぎす）の句を数十種作り、以後、「子規」と号するようになる。時鳥は、「啼いて血を吐く」と言われ、肺病の象徴であった。子規は、この時、「今より十年の命」（「喀血始末」）と覚悟したという。漱石は、明治 22 年（1889）5 月 13 日、「只今は極めて大事の場合故出来るだけの御静養は専一と奉存候」、「小にしては御母堂の為大にしては国家の為自愛せられん事こそ望ましく存候」と子規の病状を慮る書簡を送り、「帰ろふと泣かずに笑へ時鳥」、「聞かふとて誰も待たぬに時鳥」という句を添えた。漱石は、長兄・次兄を結核で亡くしており、三兄もまたこの時、結核で病床にあったため、殊更に子規の病状が気掛かりであったに違いない。子規の病をきっかけとして、漱石と子規の交流はより一層、親密さを増して行く。

5 月下旬には、漱石は、子規の和漢詩文集『七草集』（ななくさしゅう）の巻末の評ではじめて「漱石」の号を用いた。「漱石」という名は、奇しくも、子規が明治 14、15 年頃に、名乗っていた号でもあった（『筆まかせ』）。
他方、子規は、漱石が明治 22 年 9 月頃に書いた漢詩紀行文『木屑録』（ぼくせつろく）を読み、「頼みもしないのに跋を書いてよこし」（「正岡子規」）、「如吾兄者千萬年一人焉耳」と絶賛した。
余の経験によるに英学に長ずる者は漢学に短なり　和学に長ずる者は数学に短なりといふが如く　必ず一長一短あるもの也　独り漱石は長ぜざる所なく達せざる所なし、然れ共其英学に長ずるは人皆之を知る、而して其漢文漢詩に巧なる人恐らくは知らざるべし　故にこゝに附記するのみ

（『筆まかせ』）

漱石の『木屑録』は、子規の『七草集』に触発されて書かれたものであり、何よりも「正岡子規に見せる事を目的として書かれ」（小宮豊隆「『木屑録』解説」）たものであった。

「漱石」と「子規」という、希代の文学的才能を持つ二人の、比類のない盟友関係はこのようにして始まる。二人は、漱石が「一体正岡は無暗に手紙を よこした男で、其に対する分量はこちらからも遣った」（「正岡子規」）と語るように、手紙を通じても友情を深めて行く。例えば漱石は、子規に、「此頃は何となく浮世がいやになりどう考へても考へ直してもいやで／＼立ち切れず」、「貴君の手前はづかしく吾ながら情なき奴と思へどこれもmisanthropic 病なれば是非もなし」（明治 23 年 8 月 9 日）と苦悩する心情を率直に書き送っている。また二人の間では、文学観・人生観を巡って、忌憚のない批判を含んだ書簡が交換された折もあった。

御前兼て御趣向の小説は已に筆を下し給ひしや今度は如何なる文体を用ひ給う御意見なりや委細は拝見の上逐一批評を試むる積りに候へども兎角大兄の文はなよ／＼として婦人流の習気を脱せず

（明治 22 年 12 月 31 日子規宛書簡）

小生元来大兄を以て吾が朋友中一見識を有し自己の定見に由つて人生の航路に舵をとるものと信じ居候其信じきりたる朋友がかゝる小供だましの小冊子を以て気節の手本にせよとわざ／＼恵投せられたるはつや／＼其意を得ず

（明治 24 年 11 月 7 日付子規宛書簡）

学生時代の子規（明治 23 年）　　また時には二人は「妾」、「朗君」（明治 22 年 9 月 27 日子

規宛書簡）と戯れ合い、また、漱石は「あゝそう／＼、昨日眼医者へいつた所が、いつか君に話した可愛らしい女の子を見たね、―［銀］杏返しに竹なはをかけて－－天気予報なしの突然の邂逅だからひやつと驚いて思はず顔に紅葉を散らしたね」（明治24年7月18日子規宛書簡）と恋心を仄めかすような書簡を送ってもいる。

明治23年（1890）9月、漱石は帝国大学文科大学英文科、子規は同哲学科（のちに国文科に転科）に入学した。

明治20年に新設された英文科には2年上に先輩が1人いるだけであり、明治23年に英文科に入学したのは漱石ただひとりであった。また英文科の3年後輩には土井晩翠がいる。

漱石は、ディクソン教授から英語・英文学を学んだ。成績優秀な彼は、教授から依頼され、『方丈記』を英訳している。また漱石は、明治26年（1893）に来日したケーベルの講義を聴講している。

漱石は特待生となり授業料免除などの特典を受けていた。しかし、英文学研究に対する漠然とした不安と疑問を抱いていた。

私は大学で英文学といふ専門をやりました。其英文学といふものは何んなものかと御尋ねになるかも知れませんが、それを三年専攻した私にも何が何だかまあ夢中だつたのです。其頃はヂクソンといふ人が教師でした。私は其先生の前で詩を読ませられたり文章を読ませられたり、作文を作つて、冠詞が落ちてゐると云つて叱られたり、発音が間違つてゐると怒られたりしました。試験にはウォーヅウォースは何年に生れて何年に死んだとか、シエクスピヤのフォリオは幾通りあるかとか、或はスコツトの書いた作物を年代順に並べて見ろとかいう問題ばかり出たのです。年の若いあなた方にもほぼ想像が出来るでせう、果たしてこれが英文学か何うだかという事が。英文学はしばらく措いて第一文学とは何ういうものだか、是では到底解る筈がありません。（中略）兎に角三年勉強して、遂に文学は解らずじまひだつたのです。（中略）　私はそんなあやふやな態度で世の中へ出てとうとう教師になつたといふより教師にされて仕舞つたのです。幸に語学の方は怪しいにせよ、何うか斯うか御茶を濁して行かれるから、其日々々はまあ無事に済んでゐましたが、腹の中は常に空虚でした。空虚なら一そ思い切りが好かつたかも知れませんが、何だか不愉快な煮え切らない漠然たるものが、至る所に潜んでゐるようで堪らないのです。
（「私の個人主義」）

漱石は、明治25年（1892）には東京専門学校講師、明治26年には東京高等師範学校の英語嘱託となる。しかし明治27年には神経衰弱が昂じ、12月、鎌倉の円覚寺に参禅している。

一方の子規は、次第に学業よりも俳句や小説に関心を募らせていった。

「試験だから俳句をやめて準備に取りかからうと思ふと、俳句が頻りに浮かんで来る」

ほど「俳魔に魅入られ」「もう助かりやうはない」（『墨汁一滴』）と観念し、明治 25 年の学年末試験に落第したことをきっかけにして明治 26 年 3 月末、大学を退学する。漱石は、「小子の考へにてはつまらなくても何でも卒業するが上分別と存候。願くば今一思案あらまほしう」、「鳴くならば満月に鳴けほとゝぎす」（明治 25 年 7 月 19 日書簡）と子規の退学を引きとめたが、子規は自立の道を選んだのだった。

子規は、明治 25 年 12 月、陸羯南が社長を努める日本新聞社に入社した。子規は、すでに「日本」に「かけはしの記」や「獺祭書屋俳話」などを連載しており、正式に入社した後は「日本」に俳句欄を設置するなど、俳句の革新を推し進めて行く。

そして子規は、病気の身でありながら、明治 28 年 4 月 10 日、日清戦争の従軍記者として中国へ渡った。戦地では、森鴎外と会い、俳句のことなどを語り合った。しかしこの従軍は、子規の病状を一層悪化させることになったのだった。

同じ頃、漱石は子規の故郷である松山へ、英語教師として赴くことになる。

松山・熊本時代

松山時代

明治 28 年（1895）4 月、漱石は、友人菅虎雄の斡旋で、愛媛県尋常中学校へ英語の教師として赴任した。漱石の俸給は校長よりも高く、月額 80 円という破格の待遇だった。松山はのちに『坊っちやん』の舞台となる。

学校を出てから伊予の松山の中学の教師に暫くいつた、あの『坊ちやん』にあるぞなもしの訛を使ふ中学の生徒はこゝの連中だ、僕は『坊ちやん』見たよなことはやりはしなかつたよ、しかしあの中にかいた温泉なんかはあつたし、赤手拭をさげてあるいたことも事実だ、もう一つ困るのは松山中学にあの小説の中の山嵐といふ綽名の教師と寸分も違はぬのがゐるといふので漱石はあの男のことをかいたんだといはれてるのだ、決してそんなつもりぢやないのだから閉口した。
（談話「僕の昔」）

しかし漱石は、自身の教師としての適性に疑いを抱いていた。

余は教育者に適さず、教育家の資格を有せざればなり、其不適当なる男が、糊口の口を求めて、一番得易きものは、教師の位地なり、是現今の日本に、真の教育家なきを示すと同時に、現今の書生は、似非教育家でも御茶を濁して教授し得ると云う、悲しむべき事実を示すものなり
（「愚見数則」）

程なく日清戦争の従軍記者として中国に渡っていた子規が帰国した。しかし子規は帰国

の途上で喀血しており、療養のための松山帰郷となった。漱石は、子規が上京するまでの五十余日間、下宿の1階を病身の子規に貸し与え、自身は2階で暮らした。

漱石は、「小子近頃俳門に入らんと存候御閑暇の節は御高示を仰ぎたく候」（明治28年5月 26 日子規宛書簡）と述べ、「愚陀仏」と号して子規の俳句仲間に加わった。また子規が上京してからは、漱石は句稿を送り、子規に評を求めている。

僕は二階に居る大将は下に居る。其うち松山中学の俳句を遣る門下生が集まつて来る。僕が学校から帰つて見ると毎日のやうに多勢来て居る。僕は本を読む事もどうすることも出来ん。尤も当時はあまり本も読む方でも無かつたが兎に角自分の時間といふものが無いのだから止むを得ず俳句を作つた。其から大将は昼になると蒲焼きを取り寄せて御承知の通りぴちや／＼と音をさせて食ふ。其れも相談無く自分で勝手に命じて勝手に食ふ。
（「正岡子規」）

子規は明治28年（1895）10月中旬に松山を発った。子規の俳句の中でも最も有名な句の1つ、「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」は、上京の途中で立ち寄った奈良で詠まれたものである。

明治28年（1895）12月には、漱石は中根鏡子（鏡。戸籍名はキヨ）と見合いをし婚約をしている。鏡子の父、中根重一は貴族院書記官長であり、鏡子はその長女だった。漱石は鏡子についてつぎのような感想を周囲に漏らしていた。「歯並が悪くてさうしてきたないのに、それを強ひて隠さうともせず平気で居るところが大変気に入つた」（夏目鏡子『漱石の思ひ出』）。
鏡子との見合いのため上京していた漱石は、明治29年1月3日、子規の居宅（子規庵） での句会に参加した。この句会には、子規、漱石のほか、高浜虚子、河東碧梧桐、森鴎外らも参加している。

熊本時代

明治29年（1896）4月、漱石は熊本の第五高等学校に転任した。6月には、熊本の借家で鏡子との結婚式行っている。漱石は、明治29年6月10日の子規宛ての書簡の中で、「衣更へて京より嫁を貰ひけり」と詠んだ。漱石の結婚に当たって子規は「秦々たる桃の若葉や君娶る」との句を詠んでいる。

漱石は結婚して間もないころ、鏡子につぎのように語ったという。「俺は学者で勉強しなければならないのだから、お前なんかにかまつては居られない。それは承知してゐて貰ひたい」（『漱石の思ひ出』）。

一方の子規は、明治 29 年頃から脊椎カリエスのため病床生活を余儀なくされ、明治 30 年には 2 度にわたり腰部の手術を受けた。カリエスと診断された時、子規は高浜虚子に宛

てて「余レ程の大望を抱きて地下に逝く者ハあらじ」（明治 29 年 3 月 17 日付）との書簡を書き送っている。しかし子規は病床に あっても創作活動を続けた。

明治 31 年（1898）には新聞「日本」に「歌よみに与ふる書」を連載し短歌革新に乗り出した。明治 32 年には『俳諧大要』、『俳人蕪村』などを刊行し、さらに明治 33 年 2 月には「叙事文」を発表し、「写生文」を提唱する。写生文は親友の画家中村不折（第 2 部参照）を介して知った西洋絵画における「写生」の理論に示唆されたものであり、子規は、「ある景色または人事を見て面白しと思ひし時に、そを文章に直して読者をして己と同様に面白く感ぜしめんとするには、言葉を飾るべからず、誇張を加うべからず、ただありのまま見たるままにその事物を模写するを可とす」（「叙事文」）と述べている。

子規は、明治 33 年 2 月 12 日付けで、「例の愚痴談だからヒマナ時に読んでくれ玉へ」と始まる長文の手紙を漱石へ送っている。子規は、この手紙を「決して人に見せてくれ玉ふな」と述べる。

僕ハ「落泪」トイフ事ヲ書イタノヲ君ハ怪ムデアローガソレハネ斯ウイフワケダ。君ト二人デ須田へ往テ僕モ眼ヲ見テモラウタコトガアル。其時須田ニ「ドンナ病気カ」ト聞イタラ須田ハ「涙ノ穴に塞ガツタノダ」トイフタ。其時ハ何トモ思ハナカツタガ今思ヒ出ストヨホド面白イ病気ダ。ソノ頃ハソレガタメデモアルマイガ僕ハ余リ泣イタコトハナイ。勿論喀血後ノコトダガ、一度、少シ悲シイコトガアツタカラ、「僕ハ昨日泣イタ」ト君ニ話スト、君ハ「鬼ノ目ニ涙ダ」トイツテ笑ツタ。ソレガ神戸病院ニ這入ツテ後ハ時々泣クヤウニナツタガ、近来ノ泣キヤウハ実ニハゲシクナツタ。何モ泣ク程ノ事ガアツテ泣クノデハナイ。何カ分ランコトニ一寸感ジタト思フトスグ涙ガ出ル。（中略）今年ノ夏、君ガ上京シテ、僕ノ内へ来テ顔ヲ合セタラ、ナドゝ考ヘタトキニ泪ガ出ル。ケレド僕ガ最早再ビ君ニ逢ハレヌナドゝ思フテ居ルノデハナイ。併シナガラ君心配ナドスルニハ及バンヨ。君ト実際顔ヲ合ワセタカラトテ僕ハ無論泣ク気遣ヒハナイ。空想デ考ヘタ時ニ却々泣クノダ。（中略）僕ノ愚痴ヲ聞クダケ聞テ後デ善イ加減ニ笑ツテクレルノハ君デアラウト思ツテ君ニ向ツテイフノダカラ貧乏鬮引イタト思ツテ笑ツテクレ玉へ。僕ダツテ泪ガナクナツテ考ヘルト実ニヲカシイヨ。……併シ君、此愚痴ヲ真面目ニウケテ返事ナドクレテハ困ルヨ。（中略）実際君ト向合フタトキ君ガストーヴコシラエテヤロカトイフタトテ僕ハ「ウン」トイツテル位ノモノデ泣キモセヌ。ケレド手紙デソーイフコトヲイハレルト少シ涙グムネ。ソレモ手紙ヲ見テスグ涙モ何モ出ヤウトモセヌ。タダ夜ヒトリ寐テヰルトキニフトソレヲ考ヘ出スト泣クコトガアル。自分ノ体ガ弱ツテヰルトキニ泣クノダカラ老人ガ南無アミダ／＼トイツテ独リ泣イテイルヤウナモノダカラ、返事ナドオコシテクレ玉フナ。君ガコレヲ見テ「フン」トイツテクレレバソレデ十分ダ。（中略）

新らしい愚痴が出来たらまたこぼすかも知れないが、これだけいふて非常にさつぱりしたから、君に対して書面上に愚痴をこぼすのハもうこれ限りとしたいと思ふてゐる。金柑の御礼をいはうと思ふてこんな事になつた。決して人に見せてくれ玉ふな。もし他人に見られては困ると思ふて書留にしたのだから。

子規は、3 月 3 日には漱石の長女・筆子の初節句のために雛人形を送った。それは、「いずれかといえばみすばらしいありふれた三人官女」。しかし「この雛の小さくはえないのが、かえって居士の生活が偲ばれて、またなくゆかしくも有難い」（松岡譲「子規の雛」）。

さらに6月中旬には漱石に自筆の「あづま菊」の絵を送っている。子規は、明治32年（1889）秋頃から、中村不折から贈られた絵の具を用いて写生画を始めた。晩年の子規は絵を書くことに大きな慰めと喜びを見出したのだった。

「あづま菊」には、「コレハ萎ミカケタ処ト思ヒタマヘ／画ガマヅイノハ病人ダカラト思／ヒタマヘ嘘ダト思ハヾ肱ツイテカイ／テ見玉ヘ」との子規の添え書きがある。漱石は子規のこの絵について次のように語る。「一輪花瓶に挿した東菊で、図柄としては極めて単簡な」この絵を描くために、子規は「非常な努力を惜しまなかつた様に見える」。漱石は、この絵には、子規の「隠し切れない拙が溢れてゐる」（「子規の画」）。

東菊によつて代表された子規の画は、拙くて且真面目である。才を呵して直ちに章をなす彼の文筆が、絵の具皿に浸ると同時に、忽ち堅くなつて、穂先の運行 がねつとり竦んで仕舞つたのかと思ふと、余は微笑を禁じえない。（中略）　　子規は人間として、又文学者として、最も「拙」の欠乏した男であつた。永年彼と交際をした何の月にも、何の日にも、余は未だ曾て彼の拙を笑ひ得るの機会を捉へ得た試がない。又彼の拙に惚れ込んだ瞬間の場合さへ有たなかつた。彼の歿後殆ど十年にならうとする今日、彼のわざわざ余の為に描いた一輪の東菊の中に、確に此一拙字を認める事の出来たのは、其結果が余をして失笑せしむると、感服せしむるとに論なく、余に取つては多大の興味がある。たゞ画が如何にも淋しい。出来得るならば、子規に此拙な所をもう少し雄大に発揮させて、淋しさの償ひとしたかつた。
（「子規の画」）

文部省から 2 年間の英国留学を命じられた漱石は、明治 33 年（1900）8 月 26 日、寺田寅彦とともに子規を見舞った。これが漱石と子規の最後の面会となった。子規は、『ホトトギス』第 3 巻第 12 号（明治 33 年 9 月）に、次のように記した。

漱石氏は二年間英国留学を命ぜられ此夏熊本より上京、小生も久々にて面談致候。去る九月八日独逸船に乗込横浜出発欧州に向はれ候。小生は一作々年大患に逢ひし後は洋行の人を送る毎に最早再会は出来まじくといつも心細く思ひ候ひしに其人次第／＼に帰り来り再会の喜を得たることも少からず候。併し漱石氏洋行と聞くや否や、迚も今度はと独り悲しく相成申候。

漱石は熊本には約 5 年間、滞在した。第五高等学校の教え子には寺田寅彦らがおり、また狩野亨吉を五高に招聘する際に尽力したのが漱石だと言われている。漱石は度々、狩野らとともに小天温泉に出かけた。この熊本での生活がのちに『草枕』や『二百十日』とし

て結実した。

英国留学時代

明治 33 年（1900）5 月、漱石は第五高等学校在任中に、文部省から 2 年間の英国留学の命令を受けた。

余が英国に留学を命ぜられたるは明治三十三年にて余が第五高等学校教授たるの時なり。（中略）余は特に洋行の希望を抱かずと云ふ迄にて、固より他に固辞すべき理由あるなきを以て承諾の旨を答へて退けり。

（『文学論』序）

明治 33 年 9 月、漱石は横浜港より出発しパリを経て、10 月 28 日に英国に到着した。

漱石は、ロンドン大学へ通い講義を聴講するとともに、シェイクスピア学者であるクレイグ先生の個人授業を受けている。しかし大学の聴講は数ヶ月でやめてしまった。

余は先づ走つて大学に赴き、現代文学史の講義を聞きたり。又個人として、私に教師を探り得て随意に不審を質すの便を開けり。

大学の聴講は三四ケ月にして已めたり。予期の興味も智識をも得る能はざりしが為めなり。私宅教師の方へは約一年間通ひたりと記憶す。

（同）

漱石は留学の機会に、有名な作品、題名だけは知っているがまだ読んだことのない作品を読破しようと決心する。しかし 1 年後、読み終えた本のあまりの少なさに愕然とする。

擅まに読書に耽るの機会なかりしが故、有名にして人口に膾炙せる典籍も大方は名のみ聞きて、眼を通さゞるもの十中六七を占めたるを平常遺憾に思ひたれば、此機を利用して一冊も余計に読み終らんとの目的以外には何等の方針も立つる能はざりしなり。かくして一年余を経過したる後、余が読了せる書物の数を点検するに、吾が未だ読了せざる書物の数に比例して、其甚だ僅少なるに驚ろき、残る一年を挙げて、同じき意味に費やすの頗る迂闊なるを悟れり。

（同）

また漱石は、幼いころから親しんできた漢文でいうところの文学と、現在彼が学んでいる英語でいうところの文学とが、まったく異なっていることに深く懊悩する。

余は少時好んで漢籍を学びたり。之を学ぶ事短きにも関らず、文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり。ひそかに思ふに英文学も亦かくの如きものなるべし。斯の如きものならば生涯を挙げて之を学ぶも、あながちに悔ゆることなかるべしと。余が単身流行せざる英文学科に入りたるは、全く此幼稚にして単純なる理由に支配せられたるなり。（中略）

卒業せる余の脳裏には何となく英文学に欺かれたるが如き不安の念あり。（中略）

翻つて思ふに余は漢籍に於て左程根底ある学力あるにあらず、然も余は之を充分味ひ得るものと自信す。余が英語に於ける知識は無論深しと云ふ可からざるも、漢籍に於けるそれに劣れりとは思はず。学力は同程度として好悪のかく迄に岐かるゝは両者の性質のそれ程に異なるが為めならずんばあらず、換言すれば漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざる可からず。

大学を卒業して数年の後、遠き倫敦の孤燈の下に、余が思想は始めて此局所に出会せり。（中略）余はこゝに於て根本的に文学とは如何なるものぞと云へる問題を解釈せんと決心したり。

（同）

「根本的に文学とは如何なるものぞと云へる問題を解釈せんと決心」した漱石はロンドンの下宿に籠り、蝿の頭ほどの小さな文字で膨大なノートを作るという作業に没頭する。

余は下宿に立て籠りたり。一切の文学書を行李の底に収めたり。文学書を読んで文学の如何なるものなるかを知らんとするは血を以て血を洗ふが如き手段たるを信じたればなり。（中略）

余が使用する一切の時を挙げて、あらゆる方面の材料を蒐集するに力め、余が消費し得る凡ての費用を割いて参考書を購へり。此一念を起してより六七ケ月の間は余が生涯のうちに於て尤も鋭意に尤も誠実に研究を持続せる時期なり。（中略）

余は余の有する限りの精力を挙げて、購へる書を片端より読み、読みたる箇所に傍註を施こし、必要に逢ふ毎にノートを取れり。始めは茫乎として際涯のなかりしものゝうちに何となくある正体のある様に感ぜられる程になりたるは五六ケ月の後なり。（中略）

留学中に余が蒐めたるノートは蠅頭の細字にて五六寸の高さに達したり。余は此のノートを唯一の財産として帰朝したり。

（同）

『文学論』序の末尾で漱石は英国留学について次のように語っている。

倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり。（中略）

英国人は余を目して神経衰弱と云へり。ある日本人は書を本国に致して余を狂気なりと云へる由。（中略）

帰朝後の余も依然として神経衰弱にして兼狂人のよしなり。親戚のものすら、之を是認するに似たり。親戚のものすら、之を是認する以上は本人たる余の弁解を費やす余地なきを知る。たゞ神経衰弱にして狂人なるが為め、「猫」を草し「漾虚集」を出し、又「鶉籠」を公けにするを得たりと思へば、余は此神経衰弱と狂気に対して深く感謝の意を表するのは至当なるを信ず。

（同）

妻・鏡子への手紙

故郷から遠く離れ英国に暮す漱石は、頻繁に妻・鏡子へ手紙を書き送り、妻からの手紙を待ち侘びていた。漱石は、明治 34 年（1901）2 月 23 日の高浜虚子に宛てた書簡には、「吾妹子を夢みる春の夜となりぬ」と記している。しかし筆不精な鏡子は、あまり返事を送らない。

書かう書かうと思ひながらも、（中略）中々いざ手紙を書くといふ時がありません。すると家郷からの手紙が待たれると見えて、ちよつとも手紙を寄こさないぢやないか、どうしたのか、いくら忙しいといつたつて、たまさか手紙の一本位書く時間のない筈はないと言つて参ります。（中略）

其後手紙では彼方へ行つて見ると、方此でそれ程とも思はなかつたことが気になると見えて、よく私の頭のハゲのこと、歯並の悪いことなどを気にして、始めのうちは手紙の度にそれを言つてよこしたものです。ハゲが大きくなるといけないから、丸髷を結つてはいけないの、オウ・ド・キニーンといふ香油をつけるといいのなどと申して来ましたが、たうとう終ひには「吾輩は猫である」の中にまで、私のハゲのことを書いて了ひました。余程気になつたものと見えます。　（『漱石の思ひ出』）

この時鏡子は、二児を抱えながら僅かな金額で生活しなければならず、さらに父・中根重一が官職を辞し相場に失敗するなどあり、窮状に陥っていたのだった。

二年半たつて夏目が帰朝した時などは、それは／＼みじめなもので、着物なんぞ今迄あつたものは殆ど着破つて満足なものはないといつていい位でした。それでも私一人のことはどうやらすむのですが、子供二人には元々お古からが何もないのですから、季節季節には何か買つてやらなければならないので、本当に弱りました。
（『漱石の思ひ出』）

鏡子が漱石へ宛てた手紙としては、明治 34 年（1901）年春のものが紹介されている（中島国彦「1901 年春、異国の夫へ―新資料・留学中の漱 石宛、鏡子夫人の手紙―」）。鏡子から送られたこの手紙は、1901 年 2 月 20 日付の漱石の手紙、「段々日が立つと国の事を思ふおれの様な不人情なものでも頻りに御前が恋しい　是丈は奇特と云つて褒めて貰はなければならぬ」への返事であった。

あなたの帰り度なつたの淋しいの女房の恋しいなぞとは今迄にないめつらしい事と驚いて居ります　しかし私もあなたの事を恋しいと思ひつゝけている事はまけないつもりです御わかれした初の内は夜も目がさめるとねられぬ位かんかへ出してこまりました　けれ共之も日か立てはしぜんと薄くなるだらうと思ひていました処中々日か立てもわすれる処かよけい思ひ出します　これもきつと一人思でつまらないと思つても何も云はずに居ましたがあなたも思ひ出して下さればこんな嬉しい事はございません　私の心か通わしたのですよ（中略）

筆は不相替あばれています　御送りした写真を御覧遊はしたでしやう　此手紙は御覧遊はしたら破いて下さい　四月十二日夜　鏡　金之助様御許

病床の子規

子規終生の地となった根岸は、「呉竹の根岸の里」、「初音の里」などと呼ばれ「竹」と「鶯」の名所として有名であり、古くから文人墨客が多数居住する、閑静で風流な土地であった。江戸時代には、画家・俳人の酒井抱一、浮世絵師の北尾重政、儒者の寺門静軒・亀田鵬斎らが住み江戸の文化を支えた。明治 20 年代には、幸田露伴、饗庭篁村、森田思軒ら、「根岸党」または「根岸派」と呼ばれる文人たちが、根岸を中心に活動していた。根岸党は、文学的な一派というよりは、むしろ、文人たちによる「サロン」という趣きが強かった言われる。また美術家の岡倉天心や新婚当初の森鴎外も根岸近辺に住み、根岸党と関わりを持ったという。

子規には根岸近郊を詠んだ多くの句がある。「根岸にて梅なき宿と尋ね来よ」、「月の根岸闇の谷中や別れ道」、「芋阪も団子も月のゆかりかな」、「障子明けよ上野の雪を一目見ん」、「人も来ぬ根岸の奥よ冬籠」、「冬ごもる人の多さよ上根岸」。

漱石の作品の中にも根岸周辺は何度か登場している。例えば『吾輩は猫である』には、苦沙弥先生と多々良三平との間に次のような会話がある。

芋坂へ行つて団子を食ひませうか。先生あすこの団子を食つた事がありますか。奥さん一辺行つて食つて御覧。柔らかくて安いです。酒も飲ませます。
（『吾輩は猫である』）

また『こゝろ』では、「私」が「先生」から、「然し君、恋は罪悪ですよ。解つてゐますか」との言葉を聞くのは、「或時花時分に」、「先生と一所に上野へ行」き、「博物館の裏から鶯渓の方角に静かな歩調で歩いて行」く最中においてであった。

子規が根岸に住みはじめたのは、明治 25 年からである。日本新聞社社長・陸羯南の紹介で上根岸 88 番地に住み、松山から母と妹を呼び寄せて生活を送った。明治 27 年からは、陸羯南の東隣である、上根岸 82 番地に転居した。いわゆる「子規庵」である。子規は、中村不折に、「文学者や美術家にとり根岸ほどよい所はない、閑静でもあり、研究にも至便の地である根岸を離れず、根岸の土となる」（和田克司「不折と子規」）、と語ったともいう。

また根岸周辺には、子規に関わりのある、高浜虚子、河東碧梧桐、中村不折、浅井忠、寒川鼠骨らも住んだ。

上根岸に動物の附いた横町が二つある。

狸横町に鶯横町。鶯横町とは優しい名だ。どんな横町であらうか。

狸横町を出た所に前田候の別邸の表門がある。それから一間余りの高さの黒板塀に添うて鶯横町と反対の方向に進むこと二十間許りで裏門へ出る。其裏門には十四五のいろ／＼の表札がおもひおもひに打つてある。其れは孰れも此邸の内の貸家に住んでゐる人の名前

である。尚ほ黒板塀に添うて左へ曲がつて更に二十間許り行くと又左へ曲る横町があつて其横町の左側は同じく黒板塀で右側は竹垣になつてゐる。其所に一つの立テ札があつて御家流の字で「鶯横町」と書てある。

此札の立つてゐる所から奥へ三十間許り曲つて淋しい横町が即ち鶯横町である。（中略）

元来幅の狭い町であるのに、高い板塀と竹籬の内から檜や椋や榛やの立木が飛び／＼に出てゐるので、益狭く感じられる。是等の木に春はよく鶯が来て啼くので鶯横町の名がおこつたのであらうといふ事だが、冬枯の今頃でも鶸や鐵嘴はよく来て高い椋の木にしかけてあるハゴにかゝつて毎日四五羽は取られるさうな。　（中略）

初めて子規氏の宅を尋ねて、なつかしく思つてゐた鶯横町に這入つて来る者は、以上の事を目撃して、さうして三軒のうちの表札を一々しらべて、最後に「正岡子規」とある表札を漸く見当てて喜んで戸を推すと、戸に附けてある鈴がチリヽンと鳴つて、玄関の障子があく前に、必ず主人の咳を聞くであらう。

（高浜虚子「根岸草蘆記事」）

子規庵には多くの文人たちが集い、子規を中心に活発な文学活動が行なわれた。このような「子規＜病牀六尺＞は言わば共同の創造の核であった」（坪内稔典『正岡子規　創造の共同性』）。特に、短歌革新を目指した子規は、明治 31 年にはじめて自宅で歌会を開き、高浜虚子や河東碧梧桐らが参加した。

子規は、明治 34 年（1901）1 月から 7 月まで新聞「日本」に『墨汁一滴』を連載し、9 月からは病床の手記である『仰臥漫録』を書き始めた。さらに明治 35 年（1902）5 月からは「日本」に『病牀六尺』の連載を開始した。連載第一回には、「病牀六尺、これが我世界である。しかも此六尺の病牀が余には広過ぎるのである」と記している。この『病牀六尺』の連載は死の直前まで続いた。子規にとって、自分の文章が新聞や雑誌に掲載されることは、生きている証に他ならなかった。

拝啓　僕ノ今日ノ命ハ　「病牀六尺」ニアルノデス　毎朝寐起ニハ死ヌル程苦シイノデス　其中デ新聞ヲアケテ病床六尺ヲ見ルト僅ニ蘇ルノデス　今朝新聞ヲ見タ時ノ苦シサ病牀六尺ガ無イノデ泣キ出シマシタ　ドーモタマリマセン（明治 35 年 5 月 20 日頃古嶋一雄宛書簡）

敬具

子規は幼い頃から何よりも小さな草花たちを愛した。「花は我が世界にして我が命なり。幼き時より今に至るまで野辺の草花に伴ひたる一種の快感は時として吾を神ならしめんとすることあり」（「吾幼児の美感」）。そして病のために起き上がることもままならない子規にとって、子規庵の「小園は余が天地に して草花は余が唯一の詩料」となった。

我に二十坪の小園あり。園は家の南にありて上野の杉を垣の外に控へたり。場末の家ま

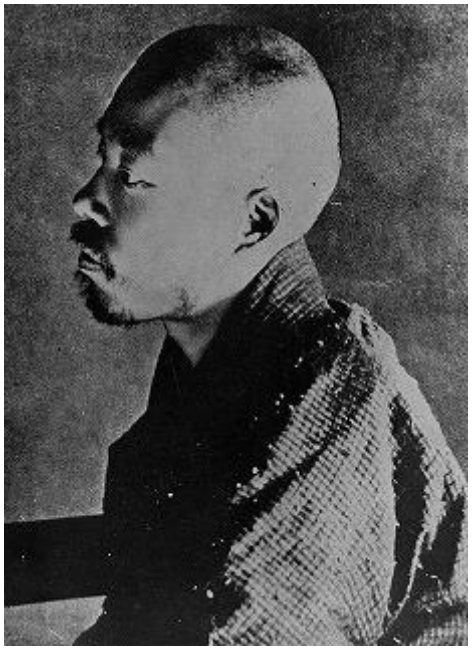
ばらに建てられたれば青空は庭の外に広がりて雲行き鳥翔る様もいとゆたかに眺めらる。（中略）　去年の春彼岸やゝ過ぎし頃と覚ゆ、鴎外漁史より草花の種幾袋贈られしを直に播きつけしが百日草の外は何も生えずしてやみぬ。中にも葉鶏頭をほしかりしをいと口をしく思ひしが何とかしけん今年夏の頃、怪しき芽をあらはしゝ者あり。去年葉鶏頭の種を埋めしあたりなれば必定それなめりと竹を立てゝ大事に育てし　て二葉より赤き色を見せぬ。

（「小園の記」）

子規は、亡くなる数日前の明治 35 年 9 月 14 日の朝、「病気になつて以来今朝程安らかな頭を持て静かに此庭を眺めた事はない」と語り、子規庵の風景を虚子に書き取らせた。

朝蚊帳の中で目が覚めた。尚半ば夢中であつたがおい／＼といふて人を起した。次の間に寝て居る妹と、座敷に寝て居る虚子とは同時に返事をして起きて来た。（中略）今朝起きて見ると、足の動かぬ事は前日と同じであるが、昨夜に限つて殆ど間断なく熟睡を得た為であるか、精神は非常に安穏であつた。顔はすこい南向きになつたまゝちつとも動かれぬ姿勢になつて居るのであるが、其儘にガラス障子の外を静かに眺めた。時は六時を過ぎた位であるが、ぼんやり曇つた空は少しの風も無い甚だ静かな景色である。窓の前に一間半の高さにかけた竹の棚には葭簀が三枚許り載せてあつて、其東側から登りかけて居る糸瓜は十本程のやつが皆瘠せてしまうて、まだ棚の上迄は得取りつかずに居る。花も二三輪しか咲いてゐない。正面には女郎花が一番高く咲いて、鶏頭は其よりも少し低く五六本散らばつて居る。秋海棠は尚衰へずに其梢を見せて居る。余は病気になつて以来今朝程安らかな頭を持て静かに此庭を眺めた事はない。嗽ひをする。虚子と話をする。南向ふの家には尋常二年生位な声で本の復習を始めたやうである。（中略）虚子と共に須磨に居た朝の事などを話ながら外を眺めて居ると、たまに露でも落ちたかと思ふやうに、糸瓜の葉が一枚二枚だけひら／＼と動く。其度に秋の涼しさは膚に浸み込む様に思ふて何ともいへぬよい心持であつた。何だか苦痛極つて暫く病気を感じ無いやうなのも不思議に思はれたので、文章に書いて見度くなつて余は口で綴る、虚子に頼んで其を記してもらうた。

（「九月十四日の朝」）



子規最後の写真（明治 33 年 12 月）　　子規が逝去したのは、この随筆から僅か数日後の、明治 35 年（1902）9 月 19 日だった。「九月十四日の朝」は、子規の死の翌日に発行された『ホトトギス』に掲載された（第 5 巻第 11 号）。母親が「余り静かなので、ふと気がつい＜て＞覗いて見ると、もう呼吸は無かつたといふ」（高浜虚子「子規居士追懐談」）。「晴れ渡つた明るい旧暦十七夜の月が大空に在」（同）る午前 1 時頃のことである。35 歳であった。

子規は辞世の句として、「糸瓜咲て痰のつまりし佛かな」、「痰一斗糸瓜の水も間にあはず」、「をとゝひのへちまの水も取らざりき」を残した。

子規の死と漱石

漱石は、英国に留学するとき、「生きて面会致す事は到底叶ひ間敷と」（明治 35 年 12 月 1 日虚子宛書簡）、子規の死を覚悟していたという。

漱石は、「子規の病を慰める為め、当地彼地の模様をかいて遥々と二三回長い消息」を送った。それは、明治 34 年（1901）4 月 9 日、20 日、26 日付の子規宛ての手紙である。漱石のロンドン生活のエピソードを諧謔を交えて綴ったこの手紙は、病床の子規を大変に喜ばせた。子規はこの手紙を「倫敦消息」と 題して『ホトトギス』に掲載した（『ホトトギス』第 4 巻 8 号及び第 4 巻第 9 号）。

子規は、明治 34 年（1901）11 月 6 日付の手紙で漱石に、「モシ書ケルナラ僕ノ目ノ明イテイル内ニ今一便ヨコシテクレヌカ」と書き送った。これが子規から送られた漱石宛の最後の手紙となった。

僕ハモーダメニナツテシマツタ、毎日訳モナク号泣シテイルヨウナ次第ダ、ソレダカラ新聞雑誌ヘモ少シモ書カヌ。手紙ハ一切廃止。ソレダカラ御無沙汰シテスマヌ。今夜ハフ

ト思イツイテ特別ニ手紙ヲカク。イツカヨコシテクレタ君ノ手紙ハ非常ニ面白カツタ。近来僕ヲ喜バセタ者ノ随一ダ。僕ガ昔カラ西洋ヲ見タガツテ居タノハ君モ知ツテルダロー。ソレガ病人ニナツテシマツタノダカラ残念デタマラナイノダガ、君ノ手紙ヲ見テ西洋ヘ往ッタヨウナ気ニナツテ愉快デタマラヌ。モシ書ケルナラ僕ノ目ノ明イテイル内ニ今一便ヨコシテクレヌカ（無理ナ注文ダガ)。(中略)

僕ハ迚モ君ニ再会スルコトハ出来ヌト思ウ。万一出来タシテモソノ時ハ話モ出来ナクナッテルデアロー。実ハ僕ハ生キテヰルノガ苦シイノダ。僕ノ日記ニハ「古白曰来」ノ四字ガ特書シテアル処ガアル。

書キタイコトハ多イガ苦シイカラ許シテクレ玉ヘ。

しかし下宿に閉じ籠り、「神経衰弱と狂気」に陥る程に「根本的に文学とは如何なるものぞと云へる問題」と格闘する漱石は、子規に宛てて、さらなる「倫敦消息」を書き送ることは出来なかった。子規の願いを聞き届けることができなかったという思いは、漱石に深い後悔をもたらしたに違いない。漱石は、帰国後、倫敦での自転車稽古の顛末を記した「自転車日記」(『ホトトギス』第 6 巻第 10 号）を執筆する。それは果たすことのできなかった子規への「今一便」であったのかもしれない。

小宮豊隆は小説家・夏目漱石が誕生する機縁を作ったのは子規だとし、次のように述べている。

漱石は子規にせがまれて、『ホトトギス』に『倫敦消息』を書いた。漱石がロンドンから帰って来た時には、子規は既に死んでいたが、当時子規の後継者として『ホトトギス』を経営していた高浜虚子は、漱石にせがんで、漱石に『自転車日記』を書かせ、『幻影の盾』を書かせ、『坊つちやん』を書かせた。さうして漱石は、竟に教壇を去って、純粋な作家になった。(中略）子規は作家漱石を作り上げる上に、なくてはならない重要な人物であつたと言つても、決して過言ではなかつたのである。―勿論子規がなくても、漱石の内なる宝庫は、何等かの機縁に触発されて、その全貌を示し得たには違ひなかつた。然し若し子規がなかつたら、漱石は或は、学者としてのみ、その一生を過ごしてゐたのかも知れなかつた。その意味では、漱石と子規との交際は、作家漱石にとつては、殆んど運命的 なものであつたと言つて可いのである。

（小宮豊隆「『木屑録』解説」）

小説執筆時代 I

漱石は明治 36 年（1903）1 月に帰国した。同年 4 月、第一高等学校英語嘱託、東京帝国大学文科大学講師に就任する。

一高では明治 36 年 5 月 22 日に、漱石の教え子であった藤村操が「華厳の滝」に入水するという事件が起こった。漱石は、宿題をして来ない藤村を厳しく叱ったことがあったた

め、自分の叱責が原因で藤村が自殺したのではないかと考えたようである。
　東京帝国大学では、漱石は、「英文学概説」などを講義する。語学に厳しく理論的で緻密な漱石の授業は、前任者であったラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の情熱的な授業に親しんでいた生徒たちに違和感を与えた。漱石の教え子の一人であった金子健二は次のように回想している。

　特に漱石先生の講義は、その研究のシステムが文学それ自身を鑑賞する時に必要と考えられる批評学の一端を分析的に取扱おうとする所に重点が措いてあった為に、ヘルン先生の如く立派な芸術は理くつぬきにして直覚的に鑑賞すべきものであるという立場とは既に根本的に異なっていたのである。
（金子健二『人間漱石』）

　しかし一般講義の『マクベス』の授業は、当時、シェイクスピアの劇が上演され人気を博していたこともあり、「大入繁昌」（同）だったという。

　帰国後の漱石は精神的に不安定な状態が続く。このような不安な日々は妻の鏡子によれば明治 36 年（1903）6 月頃から明治 37 年（1904）5 月頃まで続いたようである。妻の鏡子は次のように回想している。
　梅雨期頃からぐん／＼頭が悪くなつて、七月に入つては益々悪くなる一方です。夜中に何が癪に障るのか、無暗と癇癪をおこして、枕と言わず何といはず、手当り次第のものを放り出します。子供が泣いたといつては怒り出しますし、時には何が何やらさつぱりわけがわからないのに、自分一人怒り出しては当り散らして居ります。どうにも手がつけられません。
（『漱石の思ひ出』）

　『吾輩は猫である』は、このような漱石の不安な日々の中で執筆された。『吾輩は猫である』の第一回は、明治 38 年（1905）1 月発行の雑誌『ホ トトギス』第 8 巻第 4 号に掲載された。漱石は、一回限りのつもりで書いたが、大きな反響を呼び第十回まで同誌に断続的に掲載された。明治 38 年には『吾輩 ハ猫デアル』上篇が刊行された。上篇の挿絵を担当したのは、フランス留学から帰国したばかりの画家・中村不折であった。
　漱石は、『吾輩は猫である』について、次のように述べている。
　さて正岡子規君とは元からの友人であつたので、私が倫敦に居る時正岡に下宿で閉口した模様を手紙に書いて送ると、正岡はそれを『ホトヽギス』に載せた。 『ホトヽギス』とは元から関係があつたが、それが近因で私が日本へ帰つた時（正岡はもう死んで居た）編輯者の虚子から何か書いて呉れないかと嘱まれたので始めて『吾輩は猫である』といふのを書いた。所が虚子がそれを読んで、これは不可ませんと云ふ。訳を聞いて見ると段々あ

る。今は丸で忘れて仕舞つたが、兎に角尤もだと思つて書き直した。　今度は虚子が大いに賞めてそれを『ホトヽギス』に載せたが、実はそれは一回きりのつもりだつたのだ。ところが虚子が面白いから続きを書けといふので、だん／＼書いて居るうちにあんなに長くなつて了つた。といふやうな訳だから、私はたゞ偶然そんなものを書いたといふだけで、別に当時の文壇に対してどうかうといふ考も何もなかつた。たゞ書きたいから書き、作りたいから作つたまゝで、つまり言へば私があゝいふ時機に達して居たのである。　（「時機が来てゐたんだ―処女作追懐談」）

東風君苦沙弥君皆勝手な事を申候夫故に太平の逸民に候現実世界にあの主義では如何と存候御反対御尤に候。漱石先生も反対に候。
彼らの云ふ所は皆真理に候然し只一面の真理に候。決して作者の人生観の全部に無之故其辺は御了知被下候。あれは総体が諷刺に候。現代にあんな諷刺は尤も適切と存じ猫中に収め候もし小生の個性論を論文としてかけば反対の方面と双方の働きかける所を議論致し度と存候。
（明治 39 年 8 月 7 日畔柳芥舟宛書簡）

『猫』ですか、あれは最初は何もあのように長く続けて書こうといふ考えもなし、腹案などもありませんでしたから無論一回だけで仕舞ふ積り。また斯くまで 世間の評判を受けうやうとは少しも思つて居りませんでした。最初虚子君から「何か書いて呉れ」と頼まれまして、あれを一回書いてやりました。丁度その頃文章研究会といふものがあつて、『猫』の原稿をその会へ出しますと、それを其席で寒川鼠骨君が朗読したさうですが、多分朗読の仕方でも旨かつたのでせう、甚く其席で喝采を博したさうです。（中略）
妙なもので、書いて仕舞つた当座は、全然胸中の文字を吐き出して仕舞つて、もう此次には何も書くやうなことは無いと思う程ですが、扨十日経ち廿日経つて見ると日々の出来事を観察して、又新たに書きたいやうな感想も湧いて来る。材料も蒐められる。斯んな風ですから『猫』などは書かうと思へば幾らでも長く続けられます。
（「文学談」）

一方、漱石に『ホトヽギス』への執筆をすすめた高浜虚子は次のように回想している。

此頃われ等仲間の文章熱は非常に盛んであつた。殆ど毎月のやうに集会して文章会を開いてゐた。それは子規居士生前からあつた会で、「文章には山がなくては駄目だ。」といふ子規居士の主張に基いて、われ等はその文章会を山会と呼んでゐた。（中略）遂に来る一二月の何日に根岸の子規庵で山会をやることになつてゐるのだから、それまでに何か書いてみてはどうか、その行きがけにあなたの宅へ立寄るからといふことを約束した。（中略）
この「我輩は猫である」―漱石氏は私が行つた時には原稿紙の書き出し三四行明けたまゝ

にして置いて、まだ名はつけてゐなかつた。名前は「猫伝」にしようか、それとも書き出しの第一句である「吾輩は猫である」に其儘用ひようかと思つて決しかねてゐるとの事であつた。私は「吾輩は猫である」の方に賛成した。―これは文章会員一同に、「兎に角変つてゐる。」といふ点に於て賛辞を呈せしめた。さうして明治三十八年一月発行のホトトギスの巻頭に載せた。此の一篇が忽ち漱石氏の名を文壇に嘖々たらしめた事は世人の記憶に新たなる所である。
（高浜虚子『漱石氏と私』）

明治 38 年（1905）から明治 39 年（1906）にかけて漱石は、「倫敦塔」、「カーライル博物館」、「幻影の盾」、「琴のそら音」、「一夜」、「薤露行」、「坊っちやん」、「草枕」などを相次いで発表している。
『坊つちやん』の中の坊つちやんという人物は或点までは愛すべく、同情を表すべき価値のある人物であるが、単純過ぎて経験が乏し過ぎて現今のように複雑な社会には円満に生存しにくい人だなと読者が感じて合点しさえすれば、それで作者の人生観が読者に徹したというてよいのです。
（「文学談」）

ただきれいにうつくしく暮らす、即ち詩人的にくらすという事は生活の意義の何分一か知らぬがやはり極めて僅少な部分かと思う。で『草枕』のような主人公ではいけない。あれもいいがやはり今の世界に生存して自分のよい所を通そうとするにはどうしてもイブセン流に出なくてはいけない。
（明治 39 年 10 月 26 日鈴木三重吉宛書簡）

私の『草枕』は、この世間普通にいう小説とは全く反対の意味で書いたのである。唯だ一種の感じ--美くしい感じが読者の頭に残りさえすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない。さればこそ、プロツトも無ければ、事件の発展もない。
（談話「余が『草枕』」）

鏡子は、この時期の漱石の執筆の様子について、次のように述べている。

別に本職に小説を書くといふ気もなかつたところへ、長い間書きたくて書きたくて堪らないのをこらへてゐた形だつたので、書き出せば殆ど一気呵成に続け様に書いたやうです。（中略）書いてゐるのを見てゐるといかにも楽さうで夜なんぞも一番遅くて十二時一時頃で、大概は学校から帰つて来て、夕食前後十時頃迄に苦もなく書いて了ふ有様でした。（中略）傍で見て居るとペンを執つて原稿用紙に向へば直ちに小説が出来るといつた具合に張り切つて居りました。だから油が乗つてゐたどころの段じやありません。それですもの書

き損じなどといふものは、全くといつていい程なかつたものです。
（『漱石の思ひ出』）

明治 39 年 10 月 11 日からは、「木曜日の午後三時からを面会日と定候」（明治 39 年 10 月 7 日付野村伝四宛書簡）とし、「木曜会」が開催された。

「木曜会」には、小宮豊隆、寺田寅彦、鈴木三重吉、森田草平、阿部次郎らが集った。また漱石の晩年、大正 4 年（1916）には、菊池寛、芥川龍之介、久米正雄らがはじめて木曜会に参加した。

漱石先生の面会日は週の木曜日で有る。其日の夕方から漱石先生の門に出入する若い連中が集まつて、勝手な無駄話をするのが常例に成つて居る。これは随分旧くからの仕来りで、今に至るも連綿として跡を絶たない。尤も顔触は大分変つた。初期の千駄木時代には、高浜虚子、坂本四方太（此二人はお弟子ではない。）寺田寅彦、松根東洋城など、既に一家を成した人々の顔も時々見掛けて、つゞいて三重吉、豊隆、臼川、今は第八高等学校の羅甸語を受け持つてい居る中川芳太郎なぞが重なる参者で有つた。
（「漱石山房座談」）

小説執筆時代Ⅱ

漱石は、明治 38 年（1905）頃から、教師を続けるかそれとも小説家になるか、迷っていた。例えば門下生のひとりである中川芳太郎宛ての明治 38 年 7 月 15 日付の手紙では、次のように記している。

先達日本新聞がきて何でも時々かけといふから。僕もつくづく考へたね、毎日一欄書いて毎日十円もくれるなら学校を辞職して新聞屋になった方がいゝと。

また『草枕』の執筆後の明治 39 年 10 月頃には、漱石は知人たちに宛てて次のような書簡を送っている。

余は吾文を以て百代の後に伝へんと欲する野心家なり。（中略）余は隣り近所の賞賛を求めず。天下の信仰を求む。天下の信仰を求めず。後世の崇拝を期す。此希望あるとき余は始めて余の偉大なるを感ず。
（明治 39 年 10 月 21 日森田草平宛書簡）

今迄は己れの如何に偉大なるかを試す機会がなかつた。己れを信頼した事が一度もなかつた。朋友の同情とか目上の御情とか、近所近辺の好意とかを頼りにして生活しやうとのみ生活してゐた。是からはそんなものは決してあてにしない。妻子や、親族すらもあてにしない。余は余一人で行く所迄行つて、行き尽いた所で斃れるのである。

（明治 39 年 10 月 23 日狩野亨吉宛書簡）

僕は一面に於て俳諧的文学に出入すると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつて見たい。それでないと何だか難をすてゝ易につき劇を厭うて閑に走る所謂腰抜文学者の様な気がしてならん
（明治 39 年 10 月 26 日付鈴木三重吉書簡）

明治 40 年（1907）、漱石はついに教職を辞し、朝日新聞社に入社した。漱石の入社にあたっては、鳥居素川、池辺三山、渋川玄耳らが関わった。以後、漱石の小説作品はすべて朝日新聞に掲載されることになる。
大学教師が新聞社に入社したというできごとは当時、大きな話題となった。

大学を辞して朝日新聞に這入つたら逢ふ人が皆驚いた顔をして居る。中には何故だと聞くものがある。大決断だと褒めるものがある。大学をやめて新聞屋になる事が左程に不思議な現象とは思はなかつた。（中略）
新聞屋が商売ならば、大学屋も商売である。商売でなければ、教授や博士になりたがる必要はなからう。月棒を上げてもらふ必要はなからう。勅任官になる必要はなからう。新聞が下卑た商売であれば大学も下卑た商売である。只個人として営業してゐるのと、御上で御営業になるのとの差丈である。
（『入社の辞』）

明治 40 年 3 月末から 4 月にかけて、漱石は、京都、大阪を旅行した。京都は、かつて、子規とともに訪れた地であった。
子規と来て、ぜんざいと京都を同じものと思つたのはもう十五六年の昔のなる。夏の夜の月丸きに乗じて、清水の堂を徘徊して、明かならぬ夜の色をゆかしきものゝ様に、遠く眼を微茫の底に放つて、幾点の紅燈に夢の如く柔かなる空想を縦まゝに酔はしめたるは、制服の釦を真鍮と知りつゝも、黄金と強ひたる時代である。真鍮は真鍮と悟つたとき、われ等は制服を捨てゝ赤裸の儘世の中へ飛び出した。子規は血を嘔いて新聞屋となる、余は尻を端折つて西国へ出奔する。御互の世は御互に物騒になつた。物騒の極子規はとう／＼骨になつた。其骨も今は腐れつゝある。子規の骨が腐れつゝある今日に至つて、よもや、漱石が教師をやめて新聞屋にならうとは思はなかつたらう。
（「京に着ける夕」）

漱石は朝日新聞入社第 1 作として「虞美人草」（明治 40 年 6 月 23 日～10 月 29 日）を発表した。小宮豊隆によれば、「三越では虞美人草浴衣を売り出す、玉宝堂では虞美人草指輪を売り出す、ステーションの新聞売子は「漱石の虞美人草」と言つて朝日新聞を売つてあ

るくといふ風に、世間では大騒ぎをした」（『夏目漱石』）という。

虞美人草は毎日かいてゐる。藤尾といふ女にそんな同情をもつてはいけない。あれは嫌な女だ。詩的であるが大人しくない。徳義心が欠乏した女である。あいつを仕舞ひに殺すのが一篇の主意である。うまく殺せなければ助けてやる。然し助かれば猶々藤尾なるものは駄目な人間になる。最後に哲学をつける。此哲学は一つのセオリーである。僕は此セオリーを説明する為めに全篇をかいてゐるのである。だから決してあんな女をいゝと思つちやいけない。
（明治 40 年 7 月 19 日小宮豊隆あて書簡）

「虞美人草」の後は、「坑夫」（明治 41 年 1 月 1 日～4 月 6 日）、「夢十夜」（明治 41 年 7 月 25 日～8 月）、続けて「三四郎」（明治 41 年 9 月 1 日～12 月 29 日）、「それから」（明治 42 年 6 月 27 日～10 月 14 日）、「門」（明治 43 年 3 月 1 日～6 月 12 日）のいわゆる「前期三部作」を連載 する。特に『三四郎』における三四郎と与次郎との関係には、学生時代の漱石と子規との関係が反映しているとも言われる。
題名―「青年」「東西」「三四郎」「平々地」　右のうち御択み被下度候。小生のはじめつけた名は三四郎に候。「三四郎」尤も平凡にてよろしくと存候。たゞあまり読んで見たい気は起り申すまじくとも覚候。
田舎の高等学校を卒業して大学に這入つた三四郎が新らしい空気に触れる。さうして同輩だの先輩だの若い女だのに接触して、色々に動いて来る。手間は此空気のうちに是等の人間を放す丈である。あとは人間が勝手に泳いで、自から波瀾が出来るだらうと思う。
（明治 41 年渋川玄耳宛書簡）

子規は果物が好きだつた。且ついくらでも食へる男だつた。ある時大きな樽柿を十六食つた事がある。それでも何ともなかつた。自分抔は到底子規の真似は出来ない。―三四郎は笑つて聞いてゐた。けれども子規の話丈には興味がある様な気がした。
（『三四郎』）

色々な意味に於てそれからである。「三四郎」には大学生の事を描たが、此小説にはそれから先の事を書いたからそれからである。「三四郎」の主人公はあの 通り単純であるが、此主人公はそれから後の男であるから此点に於ても、それからである。此主人公は最後に、妙な運命に陥る。それからさき何うなるかは書いていない。此意味に於ても亦それからである。
（『それから』予告）

拝復。葉書をありがとう。「門」が出たときから今日まで誰も何もいつてくれるものは一

人もありませんでした。私は近頃孤独という事に慣れて芸術上の同情を受けないでもどうかこうか暮らして行けるようになりました。従つて自分の作物に対して賞賛の声などは全く予期していません。しかし「門」の一部分が貴方に読まれて、そうして貴方を動かしたという事を貴方の口から聞くと嬉しい満足が湧いて出ます。
（大正元年 10 月 12 日阿部次郎宛書簡）

明治 42 年（1909）、漱石は中村是公の招待で満州、朝鮮を旅行し、「満韓ところどころ」にまとめた。

明治 43 年（1910）3 月から 6 月まで、漱石は、朝日新聞に『門』を連載した。連載終了後、漱石は胃潰瘍のため入院する。8 月には、転地療養のため伊豆の修善寺温泉に向かった。しかし宿に到着した翌日から病状が悪化し、8 月 24 日には大量の吐血をし危篤状態に陥った。いわゆる「修善寺の大患」である。 漱石はこのときの状態を「三十分の死」と呼び、つぎのように述懐している。

強ひて寐返りを右に打たうとした余と、枕元の金盥に鮮血を認めた余とは、一分の隙もなく連続してゐるとのみ信じてゐた。其間には一本の髪毛を挾む余地のない迄に、自覚が働いて来たとのみ心得てゐた。程経て妻から、左様ぢやありません、あの時三十分許りは死んで入らしつたのですと聞いた折は全く驚いた。 （中略）実を云ふと此経験―第一経験と云ひ得るかゞ疑問である。普通の経験と経験の間に挾まつて毫も其連結を妨げ得ないほど内容に乏しい此―余は何と云つてそれを形容して可いか遂に言葉に窮して仕舞ふ。余は眠りから醒めたといふ自覚さへなかつた。陰から陽に出たとも思はなかつた。微かな羽音、遠きに去る物の響、逃げて行く夢の匂ひ、古い記憶の影、消える印象の名残―凡て人間の神秘を叙述すべき表現を数え尽して漸く髣髴すべき霊妙な境界を通過したとは無論考へなかつた。たゞ胸苦しくなつて枕の上の頭を右に傾け様とした次の瞬間に、赤い血を金盥の底に認めた丈である。其間に入り込んだ三十分の死は、時間から云つても、空間から云つても経験の記憶として全く余に取つて存在しなかつたと一般である。妻の説明を聞いた時余は死とは夫程果敢ないものかと思つた。さうして余の頭の上にしかく卒然と閃いた生死二面の対照の、如何にも急劇で且没交渉なのに深く感じた。
（「思ひ出す事など」）

また明治 44 年 2 月、文部省から博士号授与の通達があったが、漱石はこれを辞退したため博士号授与を巡って事態が紛糾した。

博士制度は学問奨励の具として、政府から見れば有効に違ひない。けれども一国の学者を挙げて悉く博士たらんがために学問をすると云ふ様な気風を養成したり、又は左様思われる程にも極端な傾向を帯びて、学者が行動するのは、国家から見ても弊害の多いのは知れてゐる。余は博士制度を破壊しなけばならんとは迄は考へない。然し博士でなければ学者でない様に、世間を思はせる程博士に価値を賦与したならば、学問は少数の博士の専有

物となつて、僅かな学者的貴族が、学権を掌握し尽すに至ると共に、選に洩れたる他は全く閑却されるの結果として、厭ふべき弊害の続出せん事を余は切に憂ふるものである。余は此意味に於て仏蘭西にアカデミーのある事すらも快よく思つて居らぬ。

従つて余の博士を辞退したのは徹頭徹尾主義の問題である。

（「博士問題の成行」）

明治 45 年（1912）1 月、漱石は、『彼岸過迄』によって小説の執筆を再開する。漱石は「彼岸過迄」を連載するにあたって「自分の書くものを毎日日課のやうにして読んで呉れる読者の好意だのに、酬いなくては済まない」（「彼岸過迄に就いて」）と語っている。

「彼岸過迄」というのは元日から始めて、彼岸過迄書く予定だから単にそう名付けた迄に過ぎない実は空しい標題である。かねてから自分は個々の短編を重ねた末に、其の個々の短編が相合して一長編を構成するように仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれはしないだろうかという意見を持していた。が、ついそれを試みる機会もなくて今日迄過ぎたのであるから、もし自分の手際が許すならば此の「彼岸過迄」をかねての思はく通りに作り上げたいと考えている。

（「彼岸過迄に就いて」）

大正 3 年の漱石（「硝子戸の中」執筆頃）　　続いて「行人」（大正元年 1 月 12 日～大正 2 年 11 月 17 日）、「こゝろ」（大正 3 年 4 月 20 日～8 月 11 日）と、いわゆる「後期三部作」を完成させ、 大正 4 年（1915）には、自伝的要素の強い「道草」（大正 4 年 6 月 3 日～9 月 14 日）を発表した。続く大正 5 年 5 月からは、「明暗」（大正 5 年 5 月 26 日～12 月 14 日）を連載した。

僕は不相変「明暗」を午前中書いてゐます。心持は苦痛、快楽、器械的、この三つをかねてゐます。存外涼しいのが何より仕合せです。それでも毎日百回近くもあんな事を書いてゐると大いに俗了された心持になりますので三、四日前から午後の日課として漢詩を作ります。日に一つ位です。さうして七言律です。中々できません。厭になればすぐ已める

のだからいくつ出来るか分りません。
（大正 5 年 8 月 21 日久米正雄・芥川龍之介あて書簡）

しかし大正 5 年（1916）11 月下旬、漱石は胃潰瘍を再発させ、病床につく。そして 12 月 9 日、『明暗』を未完のまま残し、永眠した。

- ■参考文献
- ■「漱石の生涯」各ページにおける漱石および子規の写真は、神奈川近代文学館、松山市立子規記念博物館、藤田三男編集事務所より提供を受けました。写真の無断転載を禁じます。
- ■本稿は、『平成 15 年度東北大学附属図書館企画展　明治・大正期の文人たち - 漱石をとりまく人々 - 』展示会図録、「漱石と子規」に加筆・修正を施したものです。

漱石の主要作品

作品	初出	単行本
吾輩は猫である	『ホトトギス』　明治 38 年 1 月～明治 39 年 8 月 （10 回にわたり断続的に連載）	大倉書店・服部書店 上編　明治 38 年 11 月 中編　明治 39 年 11 月 下編　明治 40 年 5 月
坊っちゃん	『ホトトギス』　明治 39 年 4 月	春陽堂　『鶉籠』所収 明治 40 年 1 月
草　枕	『新小説』　明治 39 年 9 月	春陽堂　『鶉籠』所収 明治 40 年 1 月
虞美人草	『朝日新聞』　明治 40 年 6 月 23 日～10 月 29 日	春陽堂　明治 41 年 1 月
三四郎	『朝日新聞』　明治 41 年 9 月 1 日～12 月 29 日	春陽堂　明治 42 年 5 月
それから	『朝日新聞』　明治 42 年 6 月 27 日～10 月 14 日	春陽堂　明治 43 年 1 月

門	『朝日新聞』　明治 43 年 3 月 1 日～6 月 12 日	春陽堂　明治 44 年 1 月
彼岸過迄	『朝日新聞』　明治 45 年 1 月 2 日～4 月 29 日	春陽堂　大正元年 9 月
行　人	『朝日新聞』　大正元年 12 月 6 日～大正 2 年 11 月 15 日 （大正 2 年 4 月 8 日～9 月 15 日まで休載）	大倉書店　大正 3 年 1 月
こゝろ	『朝日新聞』　大正 3 年 4 月 20 日～8 月 11 日	岩波書店　大正 3 年 9 月 漱石自装
道　草	『朝日新聞』　大正 4 年 6 月 3 日～9 月 14 日	岩波書店　大正 4 年 10 月
明　暗	『朝日新聞』　大正 5 年 5 月 26 日～12 月 14 日 （大阪朝日新聞は、休載をはさみ、12 月 27 日まで） 漱石の死によって連載 188 回で中絶、未完	岩波書店　大正 6 年 1 月
主要作品全解説		

吾輩は猫である

（初　出）『ホトトギス』　明治 38 年 1 月～明治 39 年 8 月まで 10 回にわたり断続的に連載

（単行本）上編　明治 38 年 10 月　中編　明治 39 年 11 月　下編　明治 40 年 5 月　大倉

書店・服部書店
（内　容）
　猫を語り手として苦沙弥・迷亭ら太平の逸民たちに滑稽と諷刺を存分に演じさせ語らせたこの小説は「坊っちゃん」とあい通ずる特徴をもっている。それは溢れるような言語の湧出と歯切れのいい文体である。この豊かな小説言語の水脈を発見することで英文学者・漱石は小説家漱石（1867-1916）となった。（岩波文庫解説より）
（自作への言及）
　東風君、苦沙弥君、皆勝手な事を申候。それ故に太平の逸民に候。現実世界にあの主義では如何と存候。御反対御尤に候。漱石先生も反対に候。
　彼らのいふ所は皆真理に候。しかしただ一面の真理に候。決して作者の人生観の全部に無之故（これなきゆえ）その辺は御了知被下（くだされたく）候。あれは総体が諷刺に候。現代にあんな諷刺は尤も適切と存じ『猫』中に収め候。もし小生の個性論を論文としてかけば反対の方面と双方の働きかける所を議論致したくと存候。
（明治 39 年 8 月 7 日　畔柳芥舟あて書簡より）
　『猫』ですか、あれは最初は何もあのように長く続けて書こうという考えもなし、腹案などもありませんでしたから無論一回だけでしまうつもり。またかくまで世間の評判を受けようとは少しも思っておりませんでした。最初虚子君から「何か書いてくれ」と頼まれまして、あれを一回書いてやりました。丁度その頃文章会というものがあって、『猫』の原稿をその会へ出しますと、それをその席で寒川鼠骨君が朗読したそうですが、多分朗読の仕方でも旨かったのでしょう、甚くその席で喝采を博したそうです。（中略）
　妙なもので、書いてしまった当座は、全然胸中の文字を吐き出してしまって、もうこの次には何も書くようなことはないと思うほどですが、さて十日経ち廿日経って見ると日々の出来事を観察して、また新たに書きたいような感想も湧いて来る。材料も蒐められる。こんな風ですから『猫』などは書こうと思えば幾らでも長く続けられます。（「文学談」）

坊っちゃん
（初　出）『ホトトギス』　明治 39 年 4 月
（単行本）『鶉籠』所収　明治 40 年 1 月　春陽堂
（内　容）
　「坊っちゃん」は数ある漱石の作品中もっとも広く親しまれている。直情径行、無鉄砲でやたら喧嘩早い坊っちゃんが赤シャツ・狸たちの一党をむこうにまわしてくり展げる痛快な物語は何度読んでも胸がすく。が、痛快だ、面白いとばかりも言っていられない。坊っちゃんは、要するに敗退するのである。（岩波文庫 解説より）
（自作への言及）
　（中略）『坊っちゃん』の中の坊っちゃんという人物は或点までは愛すべく、同情を表す

べき価値のある人物であるが、単純過ぎて経験が乏し過ぎて現今のように複雑な社会には円満に生存しにくい人だなと読者が感じて合点しさえすれば、それで作者の人生観が読者に徹したというてよいのです。(「文学談」)

草　枕

（初　出）新小説　明治 39 年 9 月

（単行本）『鶉籠』所収　明治 40 年 1 月　春陽堂

（内　容）

「しつこい、毒々しい、こせこせした、その上ずうずうしい、いやな奴」で埋まっている俗界を脱して非人情の世界に遊ぼうとする画工の物語。作者自身これを「閑文字」と評しているが果してそうか。主人公の行動や理論の悠長さとは裏腹に、これはどこを切っても漱石の熱い血が噴き出す体の作品なのである。(岩波文庫解説より)

（自作への言及）

ただきれいにうつくしく暮らす、即ち詩人的にくらすという事は生活の意義の何分一か知らぬがやはり極めて僅少な部分かと思う。で『草枕』のような主人公ではいけない。あれもいいがやはり今の世界に生存して自分のよい所を通そうとするにはどうしてもイブセン流に出なくてはいけない。(明治 39 年 10 月 26 日　鈴木三重吉あて書簡)

私の『草枕』は、この世間普通にいう小説とは全く反対の意味で書いたのである。唯だ一種の感じ--美くしい感じが読者の頭に残りさえすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない。さればこそ、プロットも無ければ、事件の発展もない。(中略)

普通に云う小説、即ち人生の真相を味はせるものも結構ではあるが、同時にまた、人生の苦を忘れて、慰藉するという意味の小説も存在していいと思う。私の『草枕』は、無論後者に属すべきものである。(談話「余が『草枕』)

虞美人草

（初　出）朝日新聞　明治 40 年 6 月 23 日～10 月 29 日
（単行本）明治 41 年 1 月　春陽堂
（内　容）
　明治 43 年、朝日新聞に入社した漱石が職業作家として書いた第 1 作。我意と虚栄をつらぬくためには全てを犠牲にして悔いることを知らぬ藤尾に超俗の哲学者甲野、道義の人創宗近らを配してこのヒロインの自滅の悲劇を絢爛たる文体で描く。漱石は俳句を一句一句連ねるていくように文章に苦心したという。（岩波文庫解説より）
（自作への言及）
　『虞美人草』は毎日かいている。藤尾という女にそんな同情をもってはいけない。あれは嫌な女だ。詩的であるが大人しくない。徳義心が欠乏した女である。あいつをしまいに殺すのが一篇の主意である。うまく殺せなければ助けてやる。しかし助かればなおなお藤尾なるものは駄目な人間になる。最後に哲学をつける。この哲学は一つのセオリーである。僕はこのセオリーを説明するために全篇をかいているのである。だから決してあんな女をいいと思っちゃいけない。小夜子という女の方がいくら可憐だかわかりやしない。（明治 40 年 7 月 19 日小宮豊隆あて書簡）

三四郎

（初　出）朝日新聞　明治 41 年 9 月 1 日～12 月 29 日
（単行本）明治 42 年 5 月　春陽堂
（内　容）
　大学入学のために九州から上京した三四郎は東京の新しい空気のなかで、世界と人生について一つ一つ経験を重ねながら成長してゆく。筋書だけをとり出せば「三四郎」は一見何の変哲もない教養小説と見えるが、卓越した小説の戦略家漱石は一筋縄では行かぬ小説的企みを実はたっぷりと仕掛けているのだ。（岩波文庫解説より）
（自作への言及）
　題名--「青年」「東西」「三四郎」「平々地」

右のうち御択み被下度候。小生のはじめつけた名は「三四郎」尤も平凡にてよろしくと存候。ただあまり読んで見たい気は起り申すまじくとも覚候。

（田舎の高等学校を卒業して大学に這入った三四郎が新しい空気に触れる、そうして同輩だの先輩だの若い女だのに接触して色々に動いて来る、手間は此空気のうちに是等の人間を放す丈である、あとは人間が勝手に泳いで、自から波瀾が出来るだろうと思う（略）（明治 41 年渋川玄耳あて書簡）

それから

（初　出）朝日新聞　明治 42 年 6 月 27 日～10 月 14 日
（単行本）明治 43 年 1 月　春陽堂
（内　容）

若き代助は義侠心から友人平岡に愛する三千代をゆずり自ら斡旋して二人を結びあわせたが、それは「自然」にもとる行為だった。それから 3 年、ついに代助は三千代との愛をつらぬこうと決意する。「自然」にはかなうが、しかし人の掟にそむくこの愛に生きることは二人が社会から追い放たれることを意味した。　（岩波文庫解説より）

（自作への言及）

色々な意味に於てそれからである。「三四郎」には大学生の事を描たが、此小説にはそれから先の事を書いたからそれからである。「三四郎」の主人公はあの通り単純であるが、此主人公はそれから後の男であるから此点に於ても、それからである。此主人公は最後に、妙な運命に陥る。それからさき何うなるかは書いていない。此意味に於ても亦それからである。（『それから』予告）

門

（初　出）朝日新聞　明治 43 年 3 月 1 日～6 月 12 日
（単行本）明治 44 年 1 月　春陽堂
（内　容）
　横町の奥の崖下の暗い家で世間に背をむけてひっそりとして生きる宗助と御米。「彼らは自業自得で、彼らの未来を塗抹した」が、一度犯した罪はどこまでも追って来る。彼らを襲う「運命の力」が全篇を通じて徹底した＜映像＝言語＞で描かれる。「三四郎」「それから」に続く三部作の終篇。（岩波文庫解説より）
（自作への言及）
　拝復。葉書をありがとう。『門』が出たときから今日まで誰も何もいってくれるものは一人もありませんでした。私は近頃孤独という事に慣れて芸術上の同情を受けないでもどうかこうか暮らして行けるようになりました。従って自分の作物に対して賞賛の声などは全く予期していません。しかし『門』の一部分が貴方に読まれて、そうして貴方を動かしたという事を貴方の口から聞くと嬉しい満足が湧いて出ます。（大正元年 10 月 12 日阿部次郎あて書簡）

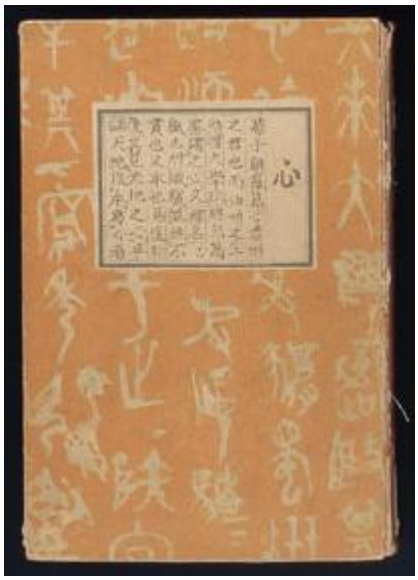
彼岸過迄

（初　出）朝日新聞　明治 45 年 1 月 2 日～4 月 29 日
（単行本）大正元年 9 月　春陽堂
（内　容）
　いくつかの短編を連ねることで一篇の長編を構成するという漱石年来の方法を具体化した作。その中心をなすのは須永と千代子の物語だが、ライヴァルの高木に対する須永の嫉妬を漱石は比類ない深さにまで掘り下げることに成功している。この激しい情念こそは漱石文学にとっての新しい課題であった。（岩波文庫解説より）
（自作への言及）
　「彼岸過迄」というのは元日から始めて、彼岸過迄書く予定だから単にそう名付けた迄に過ぎない実は空しい標題である。かねてから自分は個々の短編を重ねた末に、其の個々の短編が相合して一長編を構成するように仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれはしないだろうかという意見を持していた。が、ついそれを試みる機会もなくて今日迄過ぎたのであるから、もし自分の手際が許すならば此の「彼岸過迄」をかねての思はく通りに作り上げたいと考えている。　（「彼岸過迄に就いて」）

行　人

（初　出）朝日新聞　大正元年 12 月 6 日～大正 2 年 11 月 15 日（大正 2 年 4 月 8 日～9 月 15 日まで休載）
（単行本）大正 3 年 1 月　大倉書店
（内　容）
　妻お直と弟二郎の仲を疑う一郎は妻を試すために、二郎にお直と二人で一つ所へ行って一つ宿に泊まってくれと頼む…。知性の孤独地獄を生き、人を信じえぬ一郎は、やがて「死ぬか、気が違うか、それでなければ宗教に入るか」と言い出すのである。だが、宗教に入れぬことは当の一郎が誰よりもよく知っていた。　（岩波文庫解説より）

こゝろ



（初　出）朝日新聞　大正３年４月 20 日～8 月 11 日
（単行本）大正３年９月　岩波書店　漱石自装
（内　容）
　この小説の主人公である「先生」は、かつて親友を裏切って死に追いやった過去を背負い、罪の意識にさいなまれつつ、まるで生命をひきずるようにして生きている。と、そこへ明治天皇が亡くなり、後をおって乃木大将が殉死するという事件がおこった。「先生」もまた死を決意する。だが、なぜ…。（岩波文庫解説 より）
（自作への言及）
（前略）当時の予告には数種の短編を合してそれに『心』といふ標題を冠らせる積だと読者に断ったのであるが、其短編の第一に当る『先生の遺書』を書き込んで行くうちに、予想通り早く片が付かない事を発見したので、とう／＼その一篇丈を単行本に纏めて公けにする方針に模様がへをした。
　然し此『先生の遺書』も自から独立したやうな又関係の深いやうな三個の姉妹篇から組み立てられてゐる以上、私はそれを『先生と私』、『両親と私』、『先生と遺書』とに区別して、全体に『心』といふ見出しを付けても差支えないやうに思つたので、題は元の儘にして置いた。たゞ中味を上中下に仕切つた丈が、新聞に出た時との相違である。
　装幀の事は今迄専門家にばかり依頼してゐたのだが、今度はふとした動機から自分で遣つて見る気になつて、箱、表紙、見返し、扉及び奥附の模様及び題字、朱印、検印ともに、悉く自分で考案して自分で描いた。（後略）（『心』自序）
　あの『心』という小説のなかにある先生という人はもう死んでしまいました。名前はありますが覚えても役に立たない人です。あなたは小学の六年でよくあんなものをよみますね。あれは小供がよんでためになるものじゃありませんからおよしなさい。（後略）（大正３年４月 24 日松尾寛一あて書簡）

道　草

（初　出）朝日新聞　大正 4 年 6 月 3 日～9 月 14 日
（単行本）大正 4 年 10 月　岩波書店
（内　容）
「道草」は漱石唯一の自伝小説だとする見方はほぼ定説だといってよい。すなわち、「吾輩は猫である」執筆前後の漱石自身の実体験を「直接に、赤裸々に表現」したものであるというのである。だが実体験がどういう過程で作品化されているかを追求してゆくと、この作品が私小説系統の文学とは全く質を異にしていることが分る。（岩波文庫解説より）

明　暗

（初　出）朝日新聞　大正 5 年 5 月 26 日～12 月 14 日（大阪朝日新聞は、休載をはさみ、12 月 27 日まで）　漱石の死によって連載 188 回で中絶、未完
（単行本）大正 6 年 1 月　岩波書店
（内　容）
　主人公津田とその妻お延の生き方を中心としてエゴイズムの問題に容赦なく光をあてた「明暗」は漱石が生涯の最後に到達した思想「則天去私」の文学的実践だった。作者の死によって未完に終ったが、想像力豊かに作品の構造を読みとくことで「明暗」の「その後」を考えることは必ずしも不可能ではない。（岩波文庫解説より）
（自作への言及）
　あなたはお延という女の技巧的な裏に何かの欠陥が潜んでいるように思って読んでいた。然るに、そのお延が主人公の地位に立って自由に自分の心理を説明し得るようになっても、あなたの予期通りのものが出て来ない。それであなたは私に向って、「君は何のために主人公を変えたのか」といいたくなったのではありませんか。
　あなたの予期通り女主人公にもっと大袈裟な凄まじい欠陥を拵えて小説にする事は私も

承知していました。しかし私はわざとそれを回避したのです。何故とい うと、そうするといわゆる小説になってしまって私には（陳腐で）面白くなかったからです。私はあなたの例に引かれるトルストイのようにうまくそれを仕遂げる事が出来なかったかも知れませんが、私相応の力で、それを試みだけの事なら、（もしトルストイ流でも構わないとさえ思えば）、遣れるだろう位に己惚れています。（大正 5 年 7 月 19 日大石泰蔵あて書簡）
（前略）僕はあいかわらず『明暗』を午前中書いています。心持は苦痛、快楽、器械的、この三つをかねています。存外涼しいのが何より仕合せです。それでも毎日百回近くもあんな事を書いていると大いに俗了された心持になりますので三、四日前から午後の日課として漢詩を作ります。日に一つ位です。そうして七言律詩です。厭になればすぐ已めるのだからいくつ出来るか分りません。（大正 5 年 8 月 21 日久米正雄・芥川龍之介あて書簡）

漱石をとりまく人々

正岡子規

傑出した文学的才能を持つ二人の、比類のない盟友関係は、明治 22 年（1889）5 月、漱石が子規の文集に批評文を寄せたことから本格的に始まる。しかし二人の友情は、その始まりから既に訣別の予感を孕んでいたのではなかったか。同じ頃、子規は肺結核と診断され「余命十年」を覚悟したという。死と隣接する子規と、漱石の友情は、自ずと凝集されたものとなる。　漱石は、子規の影響により、漢詩文を作り、句作に励み、やがて子規門下の高浜虚子の勧めにより、子規と関係の深い雑誌『ホトトギス』に「吾輩は猫である」を執筆した。小説家・夏目漱石が誕生する媒介となったのは、正岡子規であった。しかし漱石が小説を書き始める時には、子規は既にない。子規は、漱石が英国に留学していた明治 35 年（1902）9 月に亡くなったのだった。　「何でも大将にならなけりや承知」せず、漱石を万事「弟扱ひ」にして憚らなかった子規。留学中の漱石へ「僕ハモーダメニナツテシマツタ」と書き送り、「僕ノ目ノ明イテイル内ニ今一便ヨコシテクレヌカ」と漱石からの「倫敦消息」を心待ちにしていた子規。しかし、倫敦の下宿に閉じ籠り、「神経衰弱と狂気」に陥る程に「根本的に文学とは如何なるものぞと云へる問題」を解明しようと格闘する漱

石は、さらなる「倫敦消息」を子規に書き送ることは出来なかった。子規の願いを聞き届けることが出来なかったという切実な思いは漱石の内に深い悔いとなって残ったに違いない。その思いから漱石は、『吾輩ハ猫デアル』中篇序に、子規への「往日の気の毒を五年後の今日に晴さう」と記した。だから『吾輩ハ猫デアル』は、子規の「霊前に献上」されたのである。

狩野亨吉

明治・大正・昭和期の思想家・教育者。秋田県に生まれ、明治 21 年(1888)東京帝国大学理学部数学科、24 年同文科大学哲学科を卒業。四高・五高教授を経て明治 31 年一高の校長、39 年京都帝国大学文科大学初代学長に就任、それぞれ独自の学風を作るが、41 年辞職。以後、書画の鑑定売買を業とし、在野の思想家として、近世日本の自然科学思想等の研究に活躍した。特に安藤昌益の『自然真営道』稿本を発見、その独自な思想を初めて紹介したことで知られる。

漱石とは、生涯を通じての親しい友人であり、大正 5 年(1916)12 月 12 日の漱石の葬儀において、友人代表として弔辞を読んだ。

狩野文庫

土井晩翠

詩人、英文学者。仙台生れ。本名土井林吉。明治 30 年(1897)東京帝国大学英文科卒。明治 32 年第 1 詩集『天地有情』によって高い評価を得、『若菜集』の島崎藤村と並び称せられる。藤村とは対照的な漢詩調の男性的詩風で、後年は校歌なども多く手がけた。明治 33 年(1900)、二高教授となる。ヨーロッパ遊学のため翌年退職するが、38 年に復職し昭和 9 年(1934)まで勤める。滝廉太郎作曲「荒城の月」の作詞者としても知られる。晩年にはホメロス の二大叙事詩『イーリアス』と『オヂュッセーア』の全韻文訳を完成した。昭和 25 年(1950)詩人としては初めて文化勲章を受章。

晩翠は漱石の東京帝国大学英文学科の後輩であるが、その出会いは晩翠がまだ第二高等学校在学中の明治 27 年(1894)で、漱石の松島旅行の途中のことであった。

晩翠文庫

ラファエル・フォン・ケーベル

哲学者、音楽家。ドイツ系ロシア人の子としてロシアに生まれ、1872 年モスクワの音楽院を卒業。その後、ドイツに留学しイエナ大学、ハイデルベルク大学で哲学を学び、1880 年ショーペンハウエルに関する論文で学位を取得した。明治 26 年(1893)東京帝国大学の哲学教師として来日し、大正 3 年（1914)まで在任。傍ら東京音楽学校でピアノを教える。第一次大戦のため帰国できず、75 才で横浜で死去。幅広い教養と高潔な人格により、大正期の教養主義思潮に強い影響を与えた。

漱石が文科大学で一番人格の高い教授としてあげているラファエル・フォン・ケーベルとの出会いは、明治 26 年(1893)で、来日してすぐのケーベルが行った美学の講義においてであった。

ケーベル文庫

小宮豊隆

大正・昭和期に活動した評論家、独文学者。福岡県出身。第一高等学校を経て東京帝国大学在学中に夏目漱石に親炙した。卒業後、慶応大学講師、法政大学教授などを経て、大正 13 年（1924）東北帝国大学教授となり、ドイツ文学講座を担当した。退官後は東京音楽学校長、学習院大学文学部長などを勤め、昭和 26 年に日本学士院会員となった。

東北帝国大学時代は阿部次郎たちと交流を深め、専門の他に俳諧、能、歌舞伎などについて研究を行った。また、昭和 15 年から 21 年までは、附属図書館の第 5 代館長として、困難な時期の図書館運営を指導し、漱石文庫の受け入れに尽力した。逝去の後、遺族から蔵書が受け入れられ、小宮文庫として東北大学で保存されている。

阿部次郎

大正・昭和期に活動した哲学者、美学者。山形県出身。山形中学、第一高等学校を経て東京帝国大学と進み、哲学を学んでケーベルに深い影響をうけた。その後に夏目漱石門下に加わり、森田草平、小宮豊隆らと親交を結ぶ。大正 2 年（1913）に慶応大学講師となり、翌年に『三太郎の日記』を出版して、哲学的人生論として多くの読者を得、大正期の教養主義、人格主義を代表する一人となった。

法文学部創設の中心メンバーの一人として、大正 10 年（1921）から東北帝国大学に奉職し美学を講じた。西洋学を究める一方で日本文化研究を重視し、大正 15 年に「芭蕉会」を興し、同僚の小宮豊隆、山田孝雄、村岡典嗣、岡崎義恵、太田正雄（木下杢太郎）らと交流した。敗戦を経て、文化国家建設に新たな目標を見出し、昭和 20 年の退官後、仙台市内に日本文化研究所を設立した。昭和 34 年の阿部の逝去後、同研究所の蔵書は東北大学に受け入れられ、阿部文庫として現在に至る。

阿部文庫

写真提供／松山子規記念博物館・東北大学史料館

漱石文庫について

「漱石文庫」は、夏目漱石（慶応 3 年（1867）～大正 5 年（1916））の旧蔵書、日記・ノート・試験問題・原稿等の自筆資料、その他漱石関係資料等から構成されている。漱石旧蔵書のほとんどを収め、洋書約 1650 冊、和漢書約 1200 冊の図書が文庫の中心であり、洋書の中には漱石が英国留学時に購入した約 500 冊の図書も含まれている。全体の量は、学者の蔵書としては決して多いとは言えないが、しかし漱石自身による書入れやアンダーラインは、蔵書全体の約 3 割にも及び、蔵書の殆どが、漱石が実際に手に取り読んだ本、あるいは読もうとした本である点が漱石文庫の最大の特徴であり、研究者たちの注目を集める所以であろう。

この文庫が本学に譲渡されることになったのは、当時の本学附属図書館長で、漱石の愛弟子でもあった小宮豊隆(1884～1966)の尽力による。搬入は、昭和 18 年（1943）からはじまり、昭和 19 年 3 月に完了した。漱石山房があった早稲田南町は、昭和 20 年 3 月 10 日の空襲で焼けてしまったから、 この漱石研究の重要資料は、本学に移されたことで焼失を免れたことになる。ちなみに小宮豊隆は、漱石文庫の受入の事情について、次のように回想している。

漱石の藏書がほんの僅かの篤志家だけに利用されるのでは勿體ない。なるべく多くの漱石研究家の役に立てるには、どうするのが一番いいかといふのが、會て我我の問題だった。そのためには漱石の書齋、書齋の調度、本棚、藏書などを遺族の住居から截り放し、漱石博物館とでもいふようなものを作るのが一番いいといふことになつたが、しかし時勢が時勢だつたので、それに必要な費用の調達しやうがなく、たうとうそれは斷念して、藏書だ

けでもどつかに寄附するといふことに方針を變更しなければならなかつた。（中略）

いろいろ考へた末、丁度私が仙臺の大學の圖書館長をしてゐた關係上、漱石の藏書を思ひ切つて仙臺へ寄贈してもらふことにした。仙臺の大學ではヴント文庫だのシュマルソウ文庫だの、その他いろいろの文庫が一纏めにして別置してある。のみならず狩野亨吉の藏書やケーベルの藏書のほとんど全部も、大學の圖書館に來てゐる。狩野亨吉は漱石の親友であり、ケーベルは漱石の敬愛してゐた先生である。利用の面から言つてあまり適切であるとは言へないが、しかし狩野文庫とケーベル文庫とがある中に、漱石文庫があることは、きはめて自然なことであるといふことができる。漱石文庫にもし靈があるとすれば、その靈はむしろ仙臺に來ることを喜ぶに違ひない。それで私は部屋の都合を無理につけて、ケーベル文庫と漱石文庫とを一室に別置し、その部屋にケーベルの寫眞と漱石の寫眞とを掲げることにした。

（「漱石文庫」『ひとのこと自分のこと』）

上に述べられているように、漱石文庫は、当初は小宮豊隆の意向で恩師ケーベルの文庫と並んで保管されていたが、その後の図書館移転等により、現在は全体が貴重書庫に納められている。昭和 46 年（1971）に『漱石文庫目録』が作成され、さらに仙台文学館開館に伴い、仙台市と共同でマイクロフィルム化を進め平成 9 年度末に完了した。